
とある魔術の転生者

那家乃ふゆい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある魔術の転生者

【Nコード】

N6835T

【作者名】

那家乃ふゆい

【あらすじ】

突如押しかけた銀行強盗によって妹共々虐殺されてしまった主人公、天翔希望。あまかけのそむしかし、そんな彼の境遇を悲しんだ神様は希望を『とある魔術の禁書目録』の世界へと転生させる。亡き妹との約束を守るため、『必要悪の教会』の魔術師兼常盤台中学特別講師の希望は今日も学園都市中を駆け抜けていく。『ミサカ00000号』助けたり超電磁砲組と仲良くなったり御坂美琴の義兄になったり、とにかく原作を引っ掻き回す作品です。コラボなど、お待ちしております。

プロローグ（前書き）

こんにちは。禁書目録の二次創作を書きました。
これからよろしく願います。

プロローグ

少年は、どこにでもいるような極普通の一般人だった。

あえて人と違ふところを上げるとするなら、小さい頃に両親を交通事故で亡くし、妹と二人で日々を生きているという身の上ぐらいのものだろう。

少年自身も、両親との思い出をあまり覚えていないため、それほど悲しむようなこともなかった。自分より二つ年下妹もまた然り。

生活費に関しては、国から出される生活保護金や親戚からの援助もあり、そこまで苦勞はしておらず、兄妹揃って学校に通うことも達成していた。

多少のハンデがあるものの、少年と妹はお互いに励まし合い、平和に過ごしていたのだった。

——しかし、彼らの平穩はある事件をきっかけに音を立てて崩れることとなる。

それは、ある春の日のことだった。

少年は、この春に高校生となる妹の入学準備をするため、兄妹揃って銀行を訪れていた。

休みがある度に入れていたバイトのおかげで、少しの金銭的不安もなく妹の制服や教科書などの学業セットを揃えることができるようになっていた。

入学シーズンのせいかもしれないもよりかなり長めの行列に並び、新しく始まる高校生活に頼の緩みが止まらない妹を少年がからかっている。周囲の人々も、そんな兄妹の微笑ましい光景に暖かい視線を向けていた。

そんなとき、銀行の自動ドアが開き、五人ほどの男達が列をなすようにして入ってきた。特段怪しい格好でもない、それぞれが現代

風のラフな服装だったため、視線を向けていた人々はすぐに自らの日常へと視線を戻そうとした。……………が。

パン、と無機質な音が室内に響き渡り、同時にカウンターの上に置かれていた花瓶がけたたましい音を立てて破裂した。銀行内は沈黙に包まれ、人々の視線が音源へと集まる。そう――

――ニヤついた笑いを浮かべながら、煙をあげる拳銃を持った男達へと。

掴みはバツチリ、と言わんばかりな笑顔を浮かべた男達は、淡々と人々へと告げた。

『あー、今ので大体予想は付いてるとは思っただけどお……俺達、銀行強盗っす』

パンパン、と二発の銃声が鳴り響く、それは混乱し、逃げ惑おうとしていた人々を鎮めるには十分すぎる脅しだった。

『お兄ちゃん……怖いよ……』

『大丈夫。じつと静かにしていれば、怖くなんかないよ。兄ちゃんがついてるからさ』

突然の事態に処理が追いつかず、精神が疲労しきっている妹を励ますかのように少年は妹の頭を撫で続ける。

その間も強盗による演説は続いていた。

『こつちもさあ、別に人殺しにはなりたくないのよね。とりあえず、さつさとアタッシュケース……あるよね？ それに金を詰めてくれないかな？ 急いでくれないと、閻魔大王の仕事が一つ二つ増えることになっちゃうよお？』

ギヤハハハ、と下卑た笑い声を上げる強盗集団。人々は、恐怖に
慄きながらも警察が来ることを信じてただひたすらに耐え続けてい
た。……そして、

悲劇のショーが幕を上げた。

『お？ 嬢ちゃん、なかなか可愛いじゃねえか』
『ひっ！』

突然、強盗の一人が、少年の妹に目を付けたのだ。
妹はどうしていいか分からず、双眸から涙をとめどなく溢れさせ
ている。

妹の身の危険を感じ、少年はその男へと叫んだ。

『やめろ！ 妹には手を出すな！』
『ああ？ おお、いいねえ。これぞ美しき兄妹愛ってか？』
『妹は関係ないだろ！ お前たちの目的は金じゃないのか！』
『もちろん、金だぜ？ でもよお……どうやら欲しいもんが増えち
まったみたいだわ』
『お前ら……！』

少年がギリリと奥歯をかみしめる。

男はそんな少年を鼻で笑い、妹へと手を伸ばした。

『さあて、嬢ちゃん。向こうでお兄さんと気持ちいいことをしよう
か』

『ひっ！ い、嫌……。お兄ちゃん、助けて……』
『ギヤハハハハ！ お兄ちゃん、だってよ。よかったなあ、兄思い
の妹で』

『この……野郎！』

怒りが頂点に達した。少年が全体重をかけて右腕を振り切る。同時に、ゴツという鈍い音が男の方から聞こえた。見ると、男の鼻から大量の血が流れ出している。

一瞬、状況の掴めなかった男だが、すぐに自分の出血を把握すると、少年の腹に拳を叩きこんだ。

『ぐ……が……』

『お兄ちゃん！』

『おお、痛つてえ……。兄ちゃん、よくもやってくれたなあ、オイ。……もういい、気が変わった。お前もコイツも二人仲良くあの世へ送つてやるよ！』

チャキ、と少年のこめかみに銃がつきつけられる。予想外の展開に周囲の人々が一斉に騒ぎ立てた。

『おい！ そんな子供になんてことしてんだよ！』

『お前らにだつて良心の呵責つてもんがあるだろ！』

『お願い！ その子たちは助けてあげて！』

『……ああ？ てめえらから殺されたいのか？』

男はもう一方の手に拳銃を持つと、騒々しい人質達へと銃口を向けた。途端に喧騒が収まり再び沈黙が訪れる。

人々の素直な反応に満足したように頷くと、男は少年に向けている銃の引き金に手をかけた。

『さあて、走馬灯とやらは見れたか？ 坊主』

『くっ……』

『お兄ちゃん、ダメ！ 死んじゃ嫌だよ！ お兄ちゃん！！』

『うるせえガキだな……。安心しろ、すぐに坊主と同じところに行けるさ。……それじゃ、あばよ、妹思いの命知らずさん♪』

タアアアンツと無慈悲な銃声が鳴り響いた。

人々から悲鳴が上がる。少年は、為す術もなく床に崩れ落ちた。

『イヤ……イヤ……お兄ちゃああああん!!』

『……よし。そんなにお兄ちゃんと一緒にがイイなら、とっとと逝かせてやるよ!』

『や……め……ろ……』

『残念。そりゃ聞けねえお願いだわ』

二発目の銃声が鳴る。

失われていく視界の中で、最後に少年が見たものは、無情にも無残な肉塊へと成り果てた愛する妹の姿だった。

プロローグ（後書き）

感想、お待ちしております。

プロローグへ別れ（前書き）

次回から本編です。

プロローグへ別れ

……沈黙。

ただそれのみがすべてを支配する世界、空間。その空間に、一人の少年が浮かんでいた。……いや、浮かんでいたという表現はおかしいかもしれない。少年は空中に寝転がされていた。

「……………」

少年が目を覚ます。

何故か意識がボンヤリしていて、よく思考を纏めることができない。

混濁する意識の中、少年はふらつきながらもなんとか立ち上がった。

「ここは……どこだ……？」

見知らぬ世界。欠片も懐かしさを感じない空間。ただひたすら『白』に包まれた部屋。

そんな非常識に囲まれたからだろうか、少年の意識がゆっくりと正常化していった。……同時に、記憶が蘇る。

『あー、今ので大体予想は付いてると思うんだけどお……俺達、銀行強盗っす』

『大丈夫。じつと静かにしていれば、怖くなんかないよ。兄ちゃんがついてるからさ』

『やめろ！ 妹には手を出すな！』

『ひっ！ い、嫌……。お兄ちゃん、助けて……』

『や……め……る……』

そして、肉塊となつた妹の姿までもが頭の中に再生された。

「うわあああああああつ！！ やめろおおおおおつ！！」

少年が頭を押さえうずくまる。耐えられなかった。十七年間、自分の全てを預けることができた愛する妹の変わり果てた姿など、耐えられるはずもなかった。

「やめ……ろ……やめて……く、れ……」

息も絶え絶えに何かに向かって訴え続ける少年。

その姿は、全てを失い、為す術もないまま、ただ壊れ続ける人形のようなだった。

「……………お兄ちゃん」

そのとき、空間に一つの声が響いた。反応するように少年の顔がそちらを向く。

そこでは茶髪を肩の辺りで切り揃えた一人の少女が、少年に微笑みかけるようにして立っていた。

少女の顔を見た瞬間、少年は信じられないような顔で叫んだ。

「ひつ聖……！！」

「うん、そうだよ。お兄ちゃん」

今まで、何度も見てきた妹の笑顔。それに触発されるように少年

は妹の名前を呼んだ。……お互いが、既に死んでいることに微塵も気付かずに。

少年が聖の方へと足を進めようとする。……が、なにか見えない壁に阻まれたように、そこから動くことができない。

「聖！ 聖！ くそっ！ なんで進めないんだよ！」

「無理だよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんと私は、今、違う世界に存在しているんだから」

「……………え？」

ピタリ、と少年は必死に動かしていた足を止めた。そんな兄の様子に、聖は悲しそうな表情で淡々と告げた。

「信じられないかもしれないけど、聞いて。私とお兄ちゃんはついさっき、あの銀行強盗に殺されたの。それでね、本来ならそのまま天国とか地獄とかに行って、それぞれの対応をしてもらっただけで……一人の女神様が、私達の人生に同情したらしくて、違反を承知で、意識と記憶を残したまま別の世界に転生させてくれるんだって」

「転生……？ ちよつ、ちよつと待った！ なにがどうなってるんだよ！？ 俺達は死んでるんだろ？ じゃあ、なんで今こうやって話しているんだよ！？」

全く状況が掴めずに躊躇う少年。

聖は言葉を続けた。

「うーん……なんて言えばいいんだろ。今の私達は、魂がそれぞれの道に進む準備段階に入っている状態なの。お兄ちゃんは転生へ、そして、私はあの世へと」

「……………え？ 今……………なんて……………」

聖の言葉に、動揺を隠せない様子の少年。少女は同じ言葉を呟いた。

「お兄ちゃんは、別の世界で転生するために。私は、あの世での審判を受けるために。それぞれの魂が準備段階に入っているの」

「なんで……だよ……。なんで、転生するのが『俺』なんだよ！」

少年が、不可視の壁に手を叩きつけながら吼える。

「お前の方が全然ふさわしいじゃねえか！俺よりも短い人生だったし、俺なんかよりもよっぽど惨めな思いをしてきただろう！？それに、俺はお前にも幸せな人生を歩んで欲しいんだよ！それなのに、なんで――」

「ダメだよ、お兄ちゃん」

聖は悲しそうに笑いながら、お互いの境界線へと足を進める。少年はただ呆然と聖を見つめていた。

「私ね、お兄ちゃんが思っているほど、良い人間じゃないんだよ？」

「……どういう意味だよ……」

「お兄ちゃん、不思議に思わなかった？自分がバイトで稼いだ合計額よりも、多めの金額が通帳に入っていたこと。あれね、私が稼いだんだ」

「……お前、が？でも、どうやって……」

「うん、だからね。私みたいな中学生でも稼げる方法で。えーと、簡単に言わせてもらおうと――」

聖は、瞳の奥に宿る光を完全に消し、言い放った。

「世の中の男の人に、私の身体を買ってもらったんだ」

「っ！」

少年が、体を強張らせる。自分の妹がそんなことをしていたなんて、信じたくもなかった。しかし、それでも聖は少年の気持ちを揺さぶり続ける。

「私、必死だったんだよ？ お兄ちゃん、私の為に自分のすべてを犠牲にしようとするからさ。まあ、とある小説だけは、全巻買ってたみたいけど。それでね、お兄ちゃんが身を粉にしてまで生活費と学費を稼いでくれているのに、ただ見ていることしかできない自分が悔しくて、情けなくて仕方がなかった。でも、考えたの。お兄ちゃんを少しでも楽にするために、この身体を使おうってさ」

「馬鹿、野郎が……そんなこと、する必要が——」

「だから、こんな汚れきった私なんかより、私の為に人生を棒に振った、お兄ちゃんを救ってほしいって女神様にお願いしたんだよ」

「……でも、それでも、俺は——」

「お兄ちゃん」

ただ一言、聖は兄の名前を呼ぶ。その瞳にはいつからか強い意志の光が存在していた。

「どうしても、私を尊重したいなら、私の言うことを聞いて。私の願いは、お兄ちゃんに転生してもらうこと。それだけなの。お願いだから、一回ぐらい、私にも恩返しをさせて……ね？」

「聖……お前……」

「……………ゴメン、お兄ちゃん。もう時間みたい」

「え？ ……うわっ」

少年が軽い叫び声をあげる。いつの間にか、お互いの身体が光の粒子に変わっていった。

「聖！」

「お兄ちゃん！ 最後に、私からのお願いを聞いて！ 転生したら、その世界でできるだけ多くの人達の命を救って。それと、絶対に私のことを忘れないで……」

「ああ！ 分かったよ！ …………… 聖！」

少年が、必死に妹の名前を呼ぶ。聖はすべてをやりきったような安らかな表情をしていた。

「聖！ 聖！」

「……さようなら、お兄ちゃん」

二人の全身が完全に粒子へと変わる。

これが、お互いを愛した兄妹の最後となった。

そして、少年——『あまかけ天翔 のぞむ希望』の第二の人生が、幕を上げる。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....
。

ブログへ別れ（後書き）

感想、お待ちしております。

ブログへ御坂未来（前書き）

こんにちは。今日もあなたのそばでこっそりあなたを見守っている
ふゆいです。

今回もブログというタイトルですが、今までとは少し違う感じ
かな？

とにかく、お楽しみください。

プロローグへ御坂未来へ

薄暗い古びた研究所。そこで少女は作られた。

少女の検体番号は《ミサカ000000号》^{なまえ}。

学園都市第三位、《超電磁砲》のDNAマップを元に軍用兵器の試作機として生み出された、御坂美琴のクローンだ。

《量産型能力者計画》^{レディオノイズ計画} などというくだらない計画によって科学の英知を結集した彼女の役割は、よりよく完全な《超能力者》^{レベル5}を量産するための実験素材^{モルモット}。

そう、ただ、それだけ。

少女を支えている存在価値など、たったそれだけの儚く脆いものだった。

そして……今日も実験が始まった。

『生体電流に異常は無いようです。どうしますか？』

『もうすこし培養液の濃度を上げろ。低酸素状態での活動記録をつけるぞ』

『了解です』

助手と思わしき男の手によって少女の周りの酸素が減っていく。少し息苦しくなってきたのだが、彼らがそんなことを気にするはずもない。

『心拍数、脈拍数、僅かですが上昇しています』

『構わん、まだ許容範囲内だ。続ける』

『わかりました』

さらに濃度が上がっていく。少女には限界が近づきつつあった。薄れていく意識の中で、少女はこんなことを思っていた。

（私は……これからも、この実験を永久に続けていくことになるのでしょうか……？）

それは、今まで何度も思った自分への問いかけ。

軍用クローンの試作機^{フルチューニング}として生み出された、自分なりの唯一の考え。

……しかし、たとえこの実験が中止になったとして、少女には行く宛もない。どこかの路地裏で力尽きてしまうのが関の山であろう。それが、実験素材として作られた彼女の運命だった。

（わたし……し、は……ミサカ、は……）

酸素欠乏によって、少女の意識が闇の中へと沈んでいく。……

…そんな時だった。

バコオンッ！ という爆音とともに研究所の重く堅苦しい扉が粉砕されたのだ。

『なんだ！？ 一体何事だ！』

『わかりません！ 正体不明の爆発がいきなり発生しました！』

混乱し、状況が掴めていない科学者達。それは少女も同じだった。

（一体……どうしたんでしょうか……？）

爆発の弾みによって、少しずつ濃度が下がっていく培養液に安心

しながら、少女は破られた扉の方を見ていた。
煙が晴れる。

そこには、険しい顔で研究者たちを睨んでいる二人の男女がいた。

「だ、誰だ！ 貴様らは！」

研究者の一人が彼らに向かつて月並みな台詞を叫ぶ。彼らは淡々と言ひ放った。

「誰って……ただの《超電磁砲》と」
「通りすがりの魔術師だ」

い

「らい」……「」

「うん」

「未来！」

「ひやいつ!？」

突然の耳元での騒音によつて、少女の身体がビクンと跳ねる。慌てて目を覚ますと、目の前には呆れた表情をした少年が少女を見下ろすように立っていた。

「あ……おはようございます。希望」

「おはよう。……また、あのときの夢を見たのか？ 随分とうなざれてたぞ」

少年——希望が心配そうな声色で少女を見つめる。その視線に僅かに顔を赤らめながらも、少女は思考を纏めていた。

（ああ……また懐かしい夢を見ちゃいましたね……）

夢、というのは冒頭のあの場面のことである。

二人が研究所に入ってきてからのことは、今でもはっきり覚えている。

あの後、一瞬で科学者たちを葬った二人は、少女を培養液から解放し、助け出した。

少女には、意味が分からなかった。何故、見ず知らずのこの二人は自分なんかを助けに来たのだろう。ただそれだけを考えていた。

しかし、二人は言った。

『俺は……ただ、可哀想な美少女とのフラグを立てたかっただけさ』

『私は、可愛い妹が酷い目に合っているのを見過ごせなかっただけよ』

それだけ。たったそれだけの理由で彼らは危険を冒してまで少女を助けに来たのだ。

そして、彼らは少女を《実験素材》から、《一人の人間》へと存在を変更させた。……そう、少女に《名前》を付けたのだ。

『お前は今日から、《御坂^{みさか} 未来^{みらい}》だ』

そのとき、少女は確かに自分の心が晴れるのを感じた。自分の中に、一つの存在が生まれるのを感じたのだ。

それからトントン拍子だった。

《お姉様》^{オリジナル}とその家族に引き取られた少女は、美琴の双子の妹として家族の一員となり、美琴と同じ《常盤台中学》にも通うことになった。身の回りの世話は、常盤台中学の特別講師である《希望》がしてくれ、普通の人間と同じ生活を送れるようになったのだ。

……そして、今に至るのである。

「ほら、とつとと飯を食え。急がねえと遅刻するぞ?」

「あ、はい。ありがとうございます」

「礼はいいから。早く用意しろよ」

そう言つて、台所へと歩いていく少年——天翔希望。あの

時、未来を助け出した少年である。十七歳という本来なら高校に通わなければならない年齢にも関わらず、何故か常盤台中学の特別講師をしている。しかも、彼は学園都市の人間ではない。英国の《必要悪の教会》という所に所属している《魔術師》なのだ。

最初は全く信じられなかったが、実際に《魔法》を見せてもらったことで、信じるを得なくなった。……そんな、謎の多い少年である。

希望が作ってくれた朝食を片付け、制服へと着替えを始める。

そのとき、コンコンと扉がノックされた。

「未来ー、学校行きましたよー」

「朝から元気ですね、お姉様」

開かれた扉の先にいたのは、御坂美琴。未来のオリジナルであり、双子の姉だ。常盤台のエースと呼ばれるほどの実力者だが、最近の

噂によると、とあるツンツン頭の少年に惚れているだとかなんとか。鞆を持ち、美琴の待つ玄関へ向かう。二人を見送るため、いつのまにか希望も玄関に立っていた。

「美琴、また学校で暴れるんじゃないぞ？」

「分かってるわよ！ 少しは義妹を信じなさい！」

「へいへい。未来、今日も頑張ってたな」

「はい」

いつも通りの朝の風景。これが、未来の幸せな人生。

ポカポカする心に頬を緩ませつつも、未来は希望に向かって決まりの台詞を言った。

「それじゃ……行ってきます」

ブローグ《御坂未来》（後書き）

感想、お待ちしております。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）（前書き）

お久しぶりです。

やっと本編に入りました。更新速度は亀ですが精一杯頑張ろうと思います。

それでは、どうぞ。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）

「行つてきます」

未来はそう言つと美琴と共に部屋を出た。希望はそれを見送るといつものようにテレビの前に腰を下ろす。

常盤台中学特別講師である希望だが、所詮無能力者であるためそこまで仕事はない。唯一ともいえる授業だつて超能力とは一切関係のない科目だ。

そのため、同年代の人達に比べるとやや退屈な日常を贈っているのだつた。

（今日もとりあえず部屋で過ごしそう……）

そんなことを思いながら備え付けのテレビのリモコンを持ち上げた時だつた。

突然、コンコンと玄関のドアがノックされ、希望の返事を待たずに何者かによつて開かれたのだ。

希望が気怠そうに玄関の方を覗く。それと同時に希望へと飛びついてくる謎の物体。

咄嗟の出来事に何の対策も立てられなかった希望は為す術もなくフローリングの床へと叩きつけられた。

「いつてえ……」

「あ、ごつめ〜ん。もうちょっと抵抗すると思つてただけどさあ……ま、許してね。てへっ」

「……………」

希望の身体に跨つたまま右手の人差し指を頬に当てアイドルのよ

うなポーズをとる金髪の少女。その姿を見て、希望は幸せが一気に吹き飛んでしまいそうなほどのため息をついた。

「またお前か、食蜂……」

食蜂操祈。^{じくへくほひのみやね}常盤台中学第三学年所属の少女。アイドルのような改造制服に身を包んでおり、喋り方も一昔前のアイドルっぽい。こう見えてもここ学園都市に七人しかいない超能力者の一人で、第五位能力名は《心理掌握》である。

希望は操祈を押しつけるように、ガバツと立ち上がった。

「毎度毎度……何の用なんだよ？」

「別に、用なんてないよお？　ただ、毎朝ノゾミンの様子を見に来ているだけなんだよねえ。ほら、ノゾミンは私の生活力なんだっ」

「意味が分からん。それと、ノゾミンって言うのはやめろ。俺の名前はノゾムだ」

「ええー？　だってさあ、漢字で書いたら《希望》なんじゃん？

そんじゃ、やっぱりノゾミンが正しい読みだよお」

「うつさい。とにかく、用がないならさっさと帰れ。お前も学校があるだろうが」

パンパンと服に付いた埃をはたきながら言う希望。ひきこもりといても過言ではない生活を送っている希望だが、これでも一応教師なのだ。しかも目の前の少女は実の教え子。見逃すわけにはいかない。

希望の教師お決まりの言葉に、操祈はニヤリと妖しく笑うとこんなことを言い、希望に抱きついた。

「まあ、そんなに怒らないでよお……お兄ちゃん」

「——っ！」

ボンッと顔を真つ赤にする希望。操祈程の美少女に抱きつかれたからというのもあるが、最大の理由は《呼び方》のせいである。

前世や転生の際に妹といるいろあつた希望。その名残が影響が、詳しい原因は分からないが――

――天翔希望は某金髪サングラスもビクリなほどの妹^シ依存症候群なのだ。

操祈は見事にこの弱点を突いた。ちなみに希望は微塵も知らないことだが、この弱点は意外と常盤台内で広まってしまっている。そのため希望に怒られそうになったり、非常に稀な事態だが、希望をオトそうとするときにはこうやって呼ぶことが常盤台中生徒には当たり前となつているのだ。

希望は茹蛸のように顔を赤く染めながらすっかり裏返つてしまつてゐる声で叫んだ。

「き、急に何を言つんだこのバカ！ お前は俺の生徒だろうが！ 妹なんかじゃ決して、断じて違う？」

「それはそうだけども、私にとってノゾミンはお兄ちゃん的な存在というかぁ……ねえ？」

「『ねえ？』じゃない！」

操祈のノリに肩でゼーゼーと息をしながらツツコミを入れ続ける希望。毎度のことながら相変わらず手玉に取られているようである……と、そんなとき。

『どこでもいいな』 やつれたらいいなつ――』

何か聞き覚えのある気がする着つたが室内に響き渡る。

希望は、助かったとばかりに携帯電話へと手を伸ばし、通話ボタンをプッシュした。

「も、もしもし！ 天翔です！」

「……………っち」

操祈が腕を組みながら舌打ちをしたのはあえて触れないでおく。電話の相手は特徴的な間延びした声で話し始めた。

『あ、のぞむー、元気？ 私だよ、私』

「……………すみません、振り込め詐欺に知り合いはいないのですが……………」
『のぞむ！？ そんな悲しい反応されるとこっちも相当困るかも！』
「冗談だよ……………インデックス」

狼狽している通話相手にやや苦笑を浮かべる希望。しかし、心の奥では久しぶりに声を聴いた同僚に懐かしさを覚えていた。
インデックスと呼ばれた相手は嬉しそうな声色で言葉を続ける。

『のぞむはやっぱり相変わらずかも……………そっちの暮らしはどう？』

「まあまあかな。教師やるのもなかなか楽しいし、魔術から離れられるっていうのも新鮮だしね」

『むう……………のぞむはやっぱり捻くれ者かも……………魔術嫌いめ』

「冗談だつて」

懐かしい掛け合いに希望が楽しそうに笑う。インデックスも電話越しにはあるがクスクスと笑っていた。

『……………そうそう、本題を話さなきゃ』

「今更かよ」

『そんなこと言っちゃダメだよ、のぞむ。……………今、学園都市の近く

にいるんだけどさ、久しぶりに四人でお茶しない？ かおりもいるしさ」

「なんで神裂の名前が出るのかが知らんが……まあ、いいんじゃないか？ 旧友とも昔の話をしたいしな」

『相変わらず年寄りみたいだよ、のぞむ』

電話の向こうでインデックスが『あはは……』と苦笑いしている。希望は軽く返事を返しながらも、旧友と会える喜びに体を染めていた。

『それじゃ、十分後に門に迎えに来てねー』

「了解。んじゃな」

会話を終え、ピツと通話を終える。

そして希望は壁に掛けてあるジャケットを手に取りながら操祈に告げた。

「ということで俺は出かける。お前もとつと学校行けよー」

「えー、ノゾミンと一緒にいたいよお」

「我儘言うな。それじゃあな」

ブーたれる操祈を残し、部屋を出る希望。操祈はそれから少しの間その場に立ち尽くしていたが、流石に暇だったのか、鞆を持ち早速で部屋を出て行った。

第一話 食蜂操祈（メンタルアウト）（後書き）

感想、お待ちしております。

第二話 御坂姉妹（シスターズ）（前書き）

こんにちは。

やっとこさ超電磁砲のDVDをコンプした、ふゆいです。

さあ見るぞ！ …… 明日から後期補習ですが。

…………… それでは、お楽しみください。

第二話 御坂姉妹（シスターズ）

希望が操祈から執拗なまでのアプローチを受けていた頃、御坂未来は義姉の美琴と共に常盤台中学へと足を進めていた。

「今日もいい天気ねー。こんな日は退屈な授業なんか受けずに外で思いっきり遊びたいわー」

「お姉様はレベル5ですから、授業を受ける必要はないと思うのですが……」

美琴の発言に、呆れた表情をみせる未来。

約160万人の能力者が集うこの学園都市のベストセブン。美琴はその中でも第三位を誇る実力者だった。

「でもさ、あんたも頑張れば私みたいになれるんじゃないの？ 仮にも私のクローンなんだし」

美琴が空になったシークワサーサイダーの缶を啜えつつそんなことを言い始めた。

確かに、未来は御坂美琴のDNAマップを元に作られた軍用クローンの試作機だ。理論的には美琴のようにレベル5になれるとも言われている。

しかし――

「所詮、私はクローンですから。お姉さまのような完全な超能力者になるなんて無理なんですよ」

そもそも、美琴がレベル5になったのは彼女が努力した結果だ。いくら未来が美琴のコピーだといっても、彼女の努力の過程まで

をコピーできるわけではない。

未来の少し残念そうな表情を見て、美琴は、しまった、というように右手で顔を覆った。

（あちゃー、少し無神経だったかな……。……。よし、ここはお姉ちゃんらしく、元気づけてやろう！）

よっしゃ、と意気込む美琴。このような切り替えの良さも、彼女をレベル5という頂きまで押し上げた要因かもしれない。

美琴は「ふふふ」と某風紀委員のように妖しく笑うと、未来に身体を寄せ付けた。

「そういえばさ、未来」

「はい、なんですか、お姉様？」

美琴の呼びかけにキョトンと首を傾げる未来。そのあまりにも可愛らしい仕草に、美琴は思わず抱きしめたくなる衝動に駆られたが、すんでのところで踏みとどまり、言葉が続けた。

「あんだ、アニキのこと、どう思っているわけ？」

「？ 希望、ですか……。？」

突然の質問に未来が頭にハテナマークを浮かべる。ちなみに、『アニキ』というのは希望のことだ。

世界中を飛び回っている美琴の父、旅掛がイギリスに立ち寄った際、身寄りのなかった希望を引き取ったのである。それから、美琴は希望のことを『アニキ』と呼ぶようになったのだ。

美琴は未来の耳元に口を近づけると、小さな声でボソリと言った。

「ぶっちゃけ、あんだアニキのこと好きなの？ ……異性として」

「ぶはっ」

いきなりの爆弾に、激しく咽る未来。その顔がリンゴのように真っ赤に染まっているのは、見間違いではないだろう。

「き、急になにを言い出すんですかつ」

「あれ、違うの？ てつきりゾッコンなのかと……」

「そ、そんなわけないじゃないですか！ 私と希望は仮にも義兄妹なんですよ！？」

「あくまで、『仮にも』だけどね」

「うつ……」

美琴の適確な指摘に、未来が黙り込む。

実のところ、未来は希望に好意を抱いていた。それは、実験動物として死を待つのみだった自分を助けてくれた恩人だからというものもあったが、一緒に暮らしているうちに、彼の優しさに惹かれていったというのが大きな要因だろう。

未来の沈黙を肯定ととったのか、美琴はニヤニヤしながら未来の肩にポンと手をかける。

「……………お姉様？」

「未来……」

「はい、なんですか？」

不思議そうに美琴を見る未来に、美琴は輝かしいばかりの笑顔で言い放ったのだった。

「避妊はするのよ？」

「何の話ですか！」

常盤台中学、第二学年教室

「まったく……お姉さまはいつもいつも……」

御坂未来は自分の机に突っ伏したまま、ムスツとした顔で窓の外を見ていた。

結局、あの後もずっと美琴に希望との仲を弄られ続け、最終的には『結婚式には呼んでよねー』と、ずいぶんと先回りなことまで言われる始末。あのときの美琴の楽しそうな表情は、忘れてくても忘れられないだろう。

「……確かに、希望は魅力的ですよ？　優しいですし、心強いですし、何かと世話も焼いてくれますし……」

誰に話しかけるでもなくボソボソと呟く未来。それこそが恋する少女特有の行動ということに、未来はまったく気づいていない。そんなこんなで、窓の外に話しかけているときだった。

「みーらーいー？」

「わひゃあっ！」

未来の名前が呼ばれると同時に、突然何者かによって背後から胸を鷲掴みにされたのだ。

「なっ、えっ、ちよっ……」

「おっはー、未来。今日も良い乳してるねえ、うりうり」

「や、やめてください！ 晴香^{はるか}？」

未来が顔を真つ赤にして件の少女を制止する。晴香と呼ばれたそのポニーテールの少女は、「ちえー」と言いながら未来に密着させていた身体を渋々離れた。

^{みょうじょうはるか}妙場晴香。未来のクラスメートであり、自称親友である。

小麦色に焼けた健康的な肌と尻尾のようにピョコピョコ跳ねるポニーテールが特徴的な少女だ。ちなみに、陸上部に所属している。

能力名は『^{タミチエック}視覚阻害』。対象物を「見ている」という他者の認識を阻害し、「見えない」という認識にすり替えることができる能力である。能力強度は大能力者（レベル4）。

晴香は悔しそうに口を尖らせながら、頭の後ろで手を組んでいた。

「いいじゃん減るもんじゃないんだし……」

「そう言う問題じゃありません！ そもそも、いきなり人の胸を揉むのが異常なんです！」

「だってさー、ミコっちゃんのまな板と違って、未来はCカップじゃない？ 中学生にしては揉みごたえがありすぎるんだもん」

「り、理由になってないですよ！ 胸の大きさは関係ないでしょう！？」

大声で否定しながら、慌てて周りを見渡す未来。周りから見ればおかしい行動だが、未来にとっては死活問題だった。

（お、お姉様には聞かれてないですよね……？）

そう、胸に対して過度のコンプレックスを持っている義姉への恐怖である。

以前、冗談半分に希望がそのことについて指摘したときのことを、未来はいまだに忘れられない。

美琴はまず、磁力を使って希望を壁に張り付けにし、彼の顔ギリギリを砂鉄の剣で串刺しにした。そして、最後にはなんとあの『超電磁砲』を希望にぶっ放したのだった。

幸い、ギリギリで拘束から抜け出した希望が魔術を使って回避したのだが……下手すれば、彼は確実に閻魔大王のもとへと旅立っていただろう。

未来は美琴がいないことに安堵すると、呆れた表情で晴香を見た。

「晴香、あなたはもう少し落ち着きを持つべきではありませんか？
仮にも、私達は常盤台中学生ですよ？」

「むー、まあた未来はそうやってマジメぶるう……ノゾムせんせー
と同棲しているくせにー！」
「ぶはっ」

未来、本日二度目のむせ返り。

まさかこんなところでいきなり希望との仲を暴露されるとは思って
もいなかった。なぜ彼女がそのことを知っているのかは甚だ疑問
なところではあるが。

そして、晴香の失言と同時に、クラスメート達が未来の下へと集
まってくる。

「未来さん？ 今の話、もう少し詳しく聞かせていただけませんか
？」

「いや、その……委員長、そんな大袈裟なことじゃありませんから、

皆さんと一緒に席へと戻られてくださりませ——」

「妹さん！ 天翔先生ってプライベートじゃどんな感じなの！？」

「好きなタイプは？ よく見ているアイドルグループとかはあるの？」

「希望先生の裸とか見たことはある？」

「え、いや、その、えと……」

突如として始まった質問攻めに、ただただ狼狽する未来。そんな彼女を楽しそうに見ながら、晴香は恍惚とした表情を浮かべていた。

「未来のその困っている表情……いいわあ……」

「晴香あああああああああああ？」

私立常盤台中学。

今日もいつものように、笑いが絶えないようである。

第二話 御坂姉妹（シスターズ）（後書き）

なんだか未来のキャラが『妹達』とはまったく変わってきていますね。まあ、そのほうが人間らしくていいのですが。

感想などはどしどし送ってくださいね！ というか、送ってくださいお願いします（泣）

それではまた次回お会いしましょう。

さよ～なら～♪

第三話 神裂火織（プリエステス）（前書き）

こんにちは。

オリジナル展開って難しいなあ……。

第三話 神裂火織（プリエステス）

学園都市、外壁北門

未来がクラスメイトから集団で質問攻めにあつてから数時間が経った頃、希望は例の魔術師三人組を迎えに、北門へと来ていた。

三分ほど待ったところで、目の前に見覚えのある人影が現れる。一人は、二メートルほどの長身で赤い長髪を持ち、頬にバーコードのような入れ墨を彫っている男。

その左には、全身がすらりとしていて、片方のジーンズの裾を太腿のところで切り取った格好のポニーテールの少女。

そして、男の右には、シスター衣装に身を包んだ、ちっこい女の子がちまつと立っていた。

三人は希望を見ると、笑顔で駆け寄ってくる。

「よう」

希望は三人に軽く右手を上げると、いつもは無表情の顔をわずかに崩した。

ちっこいシスターが嬉しそうに希望の方へと走ってくる。

「のぞむ、ひっさしぶりだね！」

「さっき電話で話したばかりだろうが、インデックス」

「えへへ、それでも、久しぶりなんだよっ」

シスター……インデックスが、希望に頭を撫でられながら「にやへ」とほおを緩める。

インデックス。原作では、103000冊の魔道書を頭に中に記憶している少女で、イギリス清教がその魔道書を守るために体の中

に『自動書記』を入れこまれていた。そのため、一年おきに記憶を消さなければならなかったという悲劇のヒロインである。

もちろん、この世界においても彼女の立場は変わらなかったのだが、原作知識を持ちうる希望によって救われたのである。

希望に抱きついているインデックスを微笑ましそうに見ながらも、希望は残りの二人の方へと言葉をかけた。

「お前らも久しぶりだな。……ステイル、神裂」

「まったく……第一声目がずいぶんと簡素じゃないか」

「ステイル、そんなことは言うものではありませんよ?」

同じように、笑顔で希望と接する二人。

彼らも希望によって、原作のような悲劇から救われたのだった。しばらくの間、再会の喜びを分かち合う四人。

十分ほど経ったところで、希望が本題を切り出した。

「そんじゃ、ファミレスにでも行くか? 昼飯まだ食ってねえだろ?」

「ん、そうだね。イギリスを出てからまだ何も食べていないんだ。もちろん、僕たちにご馳走してくれるんだろう?」

「けっ、現金な奴だな、お前。……まあいいや。ほら、とつと行こうぜ?」

ステイルと馬鹿な掛け合いをしつつ、三人を誘導しようとする希望。

しかし、いざ歩き出そうとしたところで、はた、とインデックスが足を止めた。

「どうした? インデックス」

「……ステイル、私達は先にファミレスに行っておこうよ」

「うん？ …… ああ、なるほどね。そういうことなら喜んで」
「？ 一体どうしたのですか、二人とも？」

インデックスとステイルの怪しい笑いに、希望と火織が頭に疑問符を浮かべる。

そんな彼らを置いてけぼりに、インデックス達はいきなり二人で走り始めた。

「あつ、ちよつ …… 二人とも！？」

「かおりー、のぞむと話さなきゃいけないことがたくさんあるでしょー？」

「せつかくの機会なんだから、二人は仲良く後から来てくれー！」

「おいおい、お前ら道分かるのか？」

「前と同じ店なんだろう？ それなら大丈夫さ！」

「ということ …… 先に言っておくよー」

「ええっ！？ 待ってください、インデックス！ ステイル！」

火織の制止の声も聞かず、早々と去ってしまう二人。

残された希望は、面倒くさそうに頭をポリポリと掻きながら、唐突に火織の頭の上に手を置いた。

同時に、火織の顔がボンツと煙を上げたかのように真っ赤に染まる。

「なつ …… ! き、急になんですか！？」

「いや …… なんか昔のことを思い出したもんだからさ。よくしてただろ？ これ」

そう言って、希望が乗せた右手をガシガシと動かし、火織の頭を撫でる。

幼少の頃より魔術師として『必要悪の教会』で育てられてきた希

望。同じように、『天草式十字清教』で『女教皇』として、数々の重圧に耐えながらも生きてきた火織。

似たような境遇を持つ者同士なのだからだろうか、『必要悪の教会』で出会ったときから、二人は親友のように意気投合していた。

……そのせいで、某金髪サングラスやゴーレム使いからは『希望と火織はデキている』という根も葉もない噂を立てられてしまっていたが。

火織は最初は顔を火照らせていたものの、いつしか気持ちよさそうに目を細め希望の好意を受け入れていた。

「まったく……あなたはいつまでも変わりませんね」

「それはお互い様だ。そんな馬鹿長い刀、まだ持ってやがったのか」
「べ、別にいいじゃないですか！ ……別に……」

火織が背中に装備している『七天七刀』を見て、希望が呆れたように呟く。そんな彼の言葉に火織は少し声を荒げたが、すぐに表情を戻すと、背中の刀をそつと優しく撫でながら言った。

「だって……この『七天七刀』は、昔希望がくれた、大切な宝物なんですから……」

「……………そうかよ」

桃色に染まった顔で嬉しそうに言う火織があまりにも可愛かったためか、はたまた照れ隠しか、希望は火織の顔を直視できずにフィツと顔を逸らしてしまう。

希望にしてみれば、いつも世話になっっているからというだけのなんでもない贈り物に過ぎなかったのだが……火織は随分と刀を気に入ってくれているようである。

（……………まあ、喜んでくれているならいいのかもな……………）

「希望？ 何か言いましたか？」

「……なんでもねえよ」

「？ は、はあ、それなら構いませんが……」

おかしい希望ですね、と首をひねる火織を横目で見つ、はあ、と安堵のため息をつく希望。

……しかし、数分もたたないうちに、彼は再び危機（人生級）を迎えることとなる。

「お？ もしかしてアニキじゃない？ こんなところでなにしてんのよ？」

突如として後ろからかけられた聞き覚えのある声。

まさか……と首筋に嫌な汗をかきながらギギと壊れたおもちゃのように希望が後ろを振り向くと……。

「こんな昼間っからそんな美人さんとデートなんて、良いご身分じゃない。ねえ？ アニキ」

「の、希望……？ 一体何をしているのですか……？」

「……美琴、未来……」

片や嬉しそうに、片や動揺している様子の、御坂美琴、未来姉妹が希望を見ながら立っていた。後ろには白井黒子を始めた『超電磁砲組』が群をなしている。

希望は、頭の中で必死に言い訳を考えながら、こんなことを思っていた。

（未来の顔、なんかすっげえ怖えんだけど……）

普段はのんびり屋で頭の回転が遅い希望ではあるが、美琴の傍ら

で顔を俯かせ拳を握り込みわななと震えている般若の様子ぐらいは手に取るようにわかる。

数秒後、希望の頬に未来の渾身のブーメランフックが小気味よい音と共にクリーンヒットし、希望は人の身でありながら空を遊泳したのだった。

第三話 神裂火織（プリエステス）（後書き）

感想、お待ちしております♪

第四話 佐天涙子（レベル0）（前書き）

こんにちは。絶賛体育祭練習中の、ふゆいです。
今回は割と短めなのかな？ 未熟な点は見逃してください。
それでは、どうぞ♪

第四話 佐天淚子（レベル0）

数秒のバルーン状態を経て、希望が勢いよく地面に顔面から着地する。

人生に一度あるかないかの状況に目を回しつつ、彼は攻撃を繰り返した張本人に向かってあらん限りの動揺と共に絶叫を放った。

[illegible]

ガシツとお互いの胸ぐらを掴み相対する希望と未来。

まさに一触即発。某幻想殺しと最強超能力者の戦いのときを遙かに上回るほどの負のオーラが二人を包み込んでいる。

今の彼らには、いつものようなお互いを想う気持ちはない。あるのはただ相手をぶちのめそうとする闘争心だけだ。

どちらからともなく口を開き、飛び出していく罵声、罵声、罵声
まるで小学生ですね、と二人を見ながら呟いた火織だったが、状
況打破は不可能と判断したのか、同じようにボケーと突っ立ってい
る美琴たちの方に避難した。そして、恒例の自己紹介を始める。

「初めまして、希望と同郷の神裂火織と申します。いつも希望がお世話になってるみたいで……本人に代わってお礼申し上げます」

「へ？ ああ、そんなに畏まらなくてもいいわよ？ どうみても私の方が年下なんだし。もっとフレンドリーにいこう」

いつも通りの敬語で接する火織に、あははと笑う美琴。

初対面の相手にここまで砕けた対応を取ることができるというのは、もはや脱帽ものである。

「私は御坂美琴。それで、あっちが私の双子の妹の御坂未来。どっちもあの馬鹿の義妹よ」

「……ということは、あなたはイギリスで希望を引き取ったあの男性のご子息で？」

「ご子息って……まあ、そんな感じね。あ、ほら、黒子達も挨拶して」

美琴の後ろでポカーンとしていた三人が、彼女に促されて慌てて火織の前に出てくる。

最初に出てきたツインテールの少女はなんだかとてもお嬢様っぽい、と火織はなんとなく思った。

「私は白井黒子と言いますの。常盤台中学一年生で風紀委員をしております。……お姉様の害虫駆除も、私の役目ですよ？」

おほほ、と優雅に笑っている黒子だが、言っている内容はなかなか怖い。

このツインテールは要注意ですね、と火織は心のメモノートにしっかりと刻み込んだ。

「初春飾利です。柵川中学一年生で、白井さんと同じ部署の風紀委員に所属しています」

ペコリと礼儀正しく頭を下げる初春。おそらく、この面子の中ではもっとも常識に溢れている彼女ならではの見事なまでに普通の挨拶だった。

「佐天涙子です。初春のクラスメイトをやってまーす。ちなみに『無能力者（レベル0）』なんで、そこんところよくお願いしまーす」

佐天がどこか斜に構えたような態度で自己紹介を行う。初対面の火織でも察することができるほど。彼女の行動は単純さに満ち溢れていた。

（……自分の能力に、コンプレックスを持っているみたいですね……）

ここ学園都市は超能力者を育成するための機関だ。そのためか、能力が低いものに対してのぞんざいな扱いが際立ってしまっている。彼女も、それに嫌気が差している一人なのだろう。

火織は聖母のような笑みを湛えて、佐天の頭を優しく撫でた。

「ふえ！？　ちょ、いきなりなにを……」

「……大丈夫です。あなたは無力なんかじゃありませんよ」

「え？」

「確かに、この学園都市では能力のレベルで身分が決まってしまうような風潮が広まってしまっています。その美琴さんも、普段から持ち上げられたりしているはずですよ」

「それは……まあ、ね。面倒くさい話だけど」

「佐天さん。人間の本当の価値は、能力の有無で決まるような物じゃありません。誰かを、周りの人を一人でも想うことができれば、あなたは誰よりも強い人なんですよ」

「……でも、力がないと人を守れないじゃないですか」

「それは違います。力があるから人を守るんじゃない、誰かを守りたいから、人は力を発揮するんです。あなたに、今、何があっても守りたい存在はいますか？　自分の全力を以てして、守り抜きたい大切な人を持っていますか？」

「……それは……」

「おお、ういのう初春。その思春期真っ盛りなおにゃのこ的反応があたしにはドツボだよ！」

「だからってスカート捲る必要はないでしょお——」

哀れ初春。中学一年生、若干十二歳にして自分の三角地帯を男に見せびらかしてしまうというこの辱め。

容疑者佐天涙子は目に涙を浮かべながら腹を抱えて笑っている。

第三者的視点で見ると、明らかにいじめっこだ。

「希望……もしかして中学一年生に欲情したんじゃないですよね……」

「ま、待つんだ未来。あれは一般思春期男子にしてみれば極々当たり前の反応であって決して初春に興奮したとかそういうわけでは——」

「問・答・無・用？」

「ぎゃあああああああああああああああ？」

火織の視界の端では、命を懸けた痴話喧嘩が繰り広げられているが、あのバカがそう簡単に命を落とすようなことは絶対にありえないので、放っておくことにした。

なにはともあれ、六人は無事に自己紹介を終え、友人となったのである。

ちなみに、この後希望が火織にまで制裁を加えられたのは、言うまでもない。

第四話 佐天涙子（レベル0）（後書き）

感想、お待ちしております！

第五話 原作開始（オープニング）（前書き）

こんにちは。

禁書目録と超電磁砲大好き、ふゆいです。

今回はやっと、ついに、希望の魔術がお目見えです！
長かった…… やつとこの時が……！

それでは、お楽しみください。

第五話 原作開始（オープニング）

とある日曜日。

天翔希望は朝から御坂一行を伴って、街中へと出ていた。しかし、女子を連れ立っての休日だというのに、彼の表情は心なしか暗さを帯びている。

「畜生……せつかくの休みだっていうのに……なんで俺がお前達の遊びに付き合わなきゃいけないんだよ……」

「いやー、わざわざごめんねー。やっぱアニキみたいな社会人が一緒にいた方がなにかと便利でさー」

あはは、と希望の肩を叩きながら快活に笑う少女、御坂美琴。ちなみに彼女は希望とそこまで背が変わらない。美琴が160cm、希望が165cmである。

上から目線で自分を慰めてくる義妹に若干イラツとしながらも、希望は溜息を一つつくことで事なきを得ていた。

「まあ、俺も銀行とか寄らないといけねえから別にいいんだけどさ……」

「銀行？ この前行ったばかりなのに、もうお金無くなっちゃったんですか？」

肩を落とす希望の言葉に、未来が首を傾げながら喰いついてくる。今日も姉と違って恵まれた胸がとても麗しい。

しかし、知らぬが仏とはよく言ったもので、希望は額に青筋を浮かべながら、極めて冷静に言った。

「……ああ、お前の馬鹿姉が上条と会う度にビルを焦がしたり清掃

口をぶつ壊したり自動販売機を故障させたりしているから……
親父たちがいない以上、保護者的な立場の俺が弁償しないといけない
ってわけだ」

「……………（フイツ）」

いたたまれない様子で希望から顔を背ける美琴。『常盤台のエース』
なんて呼ばれてはいても、やっぱり年頃のお転婆娘という事実は
変わらないようだ。

「それにしても……………楽しみですね」

「そうだね。なんていったって本場イタリア仕込みの特性イチゴケ
ーキなんだもん！ 私達みたいな庶民じゃ到底手に入らないような
逸品が、今日、私達の胃の中に！」

「……………お前ら、ケーキごときでどんだけはいでんだよ」

そんな希望の後ろでは、柵川中学二人組が両手を顔に当てながら
ニヤニヤと妄想を浮かべていた。

今回の彼女達の目的は、最近オープンしたイタリアスイーツ専門
店。美琴が日ごろのお礼にと二人を誘ったのがきっかけだ。

ジト目で二人を見る希望に、佐天と初春はそれぞれ文句を言っ
ている。

「まあ、そんなだから希望さんは『女心が分かっていない』って
言われるんですよー！」

「この前偶然会ったツンツン頭の人も言っていましたよ？ 『アイツ
は少女の楽しみが分かっている鈍感ニブチン男ですよ』って
！」

「よし。とりあえず落ち着け二人とも。後、佐天、お前からは少し
詳しく聞かないといけないことができたからそこところケーキ喰
いながらよろしく」

あの野郎ぶつ殺す、と拳を固めて親友への虐殺フラグを立てる希望に、未来はやや頬をひきつらせながらこの場にはいない『幻想殺し』の無事を祈っていた。

「ところで希望先生。そろそろ銀行が見えてまいりましたの。私達はその広場でクレープでも食べて待っていますので、できるだけ早く戻ってきてくださいまし」

「ああ、悪いな、白井」

変態でありながらも、この中で一番常識を弁えている黒子に希望は軽く跪く気持ちさえ覚えてしまう。

しかし彼も一人前の教師。そんなみつともない真似をこんな大衆の目の前で晒すわけにはいかない。

結局、唐突に湧いてきた感情をなんとか心の奥に押しとどめ、希望はようやく見えてきた銀行の方に目を向ける。

「あれ……？」

が、あまりにも不自然な光景に希望は思わず足を止める。

隣で佐天と楽しそうに喋っていた初春も同じものに気が付いたように、可愛らしく首を傾げながら疑問を口にしていた。

「こんな日曜日の昼間からシャッターが降りているなんて……どうしたんでしょうか？」

「さあ？ 定休日か何かじゃないの？」

頭の後ろで手を組んでいた佐天がなんでもない様子で初春の疑問を軽くあしらう。

彼女達はその言葉に納得して、広場へと向かって行ったが……

…希望は、頭の片隅に引つかかったままの既視感に頭を悩ませていた。

（この展開……どこかで見覚えが……）

しかし、希望の思考はそこで強制的に中断されてしまうことになる。

突然、希望の耳に爆音が轟き、同時に吹っ飛んでいく銀行のシャッターが彼の視界に入ったのだ。

（爆発！？　こんな時間の、しかも銀行で―――）

その瞬間、希望の脳内に一つの映像が浮かび上がってきた。

『風紀委員ですの！』

『駄目えっ！』

『発火能力……能力の上昇で少々調子に乗っているみたいですね』

『黒子お……ここからは私の個人的な喧嘩だから、あんたは手え出さないでよね』

（こ、これは……前世で見たアニメの記憶！？）

『とある科学の超電磁砲』、第一話の展開。現在希望の身に起こっている状況は、まさにそれで起きた銀行強盗事件と瓜二つだった。

（どうする……？　おそらく、銀行の中にはまだ取り残されたままの人質達がいるはず……）

普通ならば、黒子達のような風紀委員にや警備員に任せておけばいいのだが……希望には、転生時に聖と交わした約束があった。

『絶対に、たくさんの人を救ってね……』

「……………畜生！」

考えるまでもなく、希望は銀行へと走り出す。
彼が原作ストーリーに介入した瞬間だった。

一方、広場にいた美琴達も突然起こった爆音に驚愕していた。
しかし、風紀委員である黒子と初春はすぐに我に帰ると、的確に指示を出していく。

「初春！ 今すぐ現在の状況を確認。人質と犯人の数、犯人の能力、レベルを調査後、本部に連絡を！」

「わかりました！」

「お姉さま達は危ないですので下がってくださいですの。ここからは私達の仕事ですわ。……………風紀委員ですの！ 一般人の皆様は速やかに広場に退避してくださいまし！」

迅速に事態の終結に向けて活動している二人。

状況に取り残されてしまった美琴と佐天、未来は三人で顔を見合
わせながらこれからどうするかを話し合っていた。

「えーと……どうします？」

「どうするもなにも……黒子達に任せておけばこんな事件はすぐに
解決するだろうし。大人しく待つておきましょう？」

「それが妥当ですね。……あれ？」

「どうしたの？ 未来」

はた、と動きを止めた未来に美琴が首を傾げる。

二人がじいつと未来を見つめる中、彼女はいきなりくるっと反転
すると、事件が起きている銀行に向かって、全力で走りだした。

「えっ、ちよっ……未来！？」

「き、急にどうしたんですか！」

「確かあの銀行には……希望が！」

未来が希望を助けに銀行へと走り出している時、希望は銀行内へ
と潜入し人質の解放に尽力していた。

「あ、ありがとうございます！」

「お礼はいいさ。それよりも、犯人は……」

「犯人達なら、あそこの裏口から……」

「サンキュー、後の人達の縄、解いてやってくれよ」

「は、はい！」

聞いた通り、裏口から外に出る希望。犯人を捕まえようと意気込んで飛び立したが……。

「まったく……あなたはいつも一人で暴走しすぎなんです。少しは自重して下さい」

「そうです。いくら先生が一流の魔術師とはいっても、この学園都市においてはただの無能力者なのですから、独走は慎んでほしいのです」

「未来……白井……」

犯人の一人の上に腰掛けている黒子と、隣で右手から光の粒子を放出している未来が呆れた視線で希望を見ていた。

二人の表情に一瞬縮こまった希望だが、未来の右手を見た途端にボソツと真顔で呟く。

「未来……お前、能力使ったな？」

「はい。別に人通りもありませんし、だいたいこの能力は私に害を及ぼすような物じゃありませんしね」

「そう言う問題じゃないだろ……誰か頭のおかしい科学者に目え付けられたらどうするつもりだよ？」

そついうと希望は溜息をつきながら肩をすくめる。

ただ今話題に出た御坂未来の能力。原作通りの『妹達』ならば、レベル3の『欠陥電気』なのだが……未来の能力はこの学園都市で

も数えるほどしかない『閃光使い（ライトニングマスター）』。
ちなみにレベル4、『大能力者』である。

これは。未来を救出した際に希望が脳を弄って改変した能力。自分はクローンであるという認識から目を背けさせるために行った処置の結果だ。

呆れかえる希望に、未来は優しい笑顔を浮かべながら身体を彼に預けつつ、言った。

「そのときは……希望が守ってくれるのでしょうか？」
「……………ちっ」

恥ずかしそうに眼を逸らし、ガシガシと頭を掻く希望。
なんだか桃色の空気を醸し出し始めている二人をジト目で見つ、黒子は拘束した犯人を立たせ、大通りへと歩いていく。

「まったく、TPOを弁えて欲しいのですわ」
「す、すみません……」
「まったく、いちいちうるせえなあ……」

しかし、ここで希望が再び足を止めた。
何か、と二人が希望の視線をたどると――

『オラ！ ソイツから手え放しやがれよ！』
『だ、駄目っ！』
『ちっ！ しつけえ女だなあ？』
『きゃあっ！』

小さい子供を庇い、犯人らしき男から暴行を加えられている佐天の姿があった。

『佐天さん!』

未来と黒子が同時に佐天の名を呼ぶ。それに気づいた佐天は痛む身体を抑えながら、それでも笑いつつ、二人に顔を向ける。

「いつ……つう。あ、あはは……情けない姿、見せちゃったなあ……」

「そ、そんなこと……」

「救護班! こちらにも怪我人ですの! すぐさま避難を!」

二人が声を上げる中、希望はひたすらにギュッと拳を握りしめていた。

(……また、守れなかった……)

傷ついた佐天の姿が、前世で守りきれなかった聖の姿と重なる。

そして、肉塊と成り果ててしまった妹の映像さえもがフラッシュバックしてきた。

襲ってくる猛烈な吐き気に耐えながら、希望は確かな足取りで、車に乗り込んだ犯人の前へと立ちふさがる。

「アニキ、私もやらせてもらっわよ」

「ああ、好きにしろ」

希望の隣でバチバチと小さな稲妻を発生させつつ、ポケットからコインを取り出す美琴。それを横目に見ながら、希望は大声で『魔法名』を口にした。

「Themis666(悪しき存在に正義の鉄槌を)?」

同時に、希望の左手にどこからともなく分厚い辞書のような本が現れる。

濃い緑の表紙に包まれたその本には、こう書かれていた。

『ゴッドバイブル
神力全書』

そして、希望は魔法を発動させた。

「神力全書、第一章『攻撃』第一節『範囲対象敵少数』第五項『地より抜粹！大地を操り、目の前の敵を空へと羽ばたかせよ！』
ヘルダンス地盤隆起？』」

希望の左手に持たれた本から眩いばかりの光が放出される。瞬間、こちらに向かつて走ってきていた車の真下のアスファルトが車を宙に押し上げるように隆起した。

「よくも！ 涙子をおおおおおおおお？」

「なっ！？」

「後は任せた、美琴！」

「オーケーアニキ！ これでも……喰らええええええええええ？」

空中に飛び上がり、身動きの取れない車など、美琴にしてみれば動かないのも同然。指の上にコインを乗せると、美琴は車に向かって音速の三倍近い速さで放ったのだった。

美琴の『超電磁砲』を喰らい、弾け飛ぶ車。

しかし、その残骸が凄まじいスピードで避難していた人質達へと降り注ぎ始める。

「あっ、やばっ！」

「このバカ！ 後のことまで考えてやれよ！」

慌てて残骸を止めようと走り出す二人だったが――

「お姉様、希望、少しは頭を冷やしましょうね？」

ギリギリで駆け付けた未来が光の粒子を広範囲で盾のように展開して、残骸を全て受け止めていた。

「な、なんだアイツらは……！」

そんな三人の活躍を見ていた犯人の一人、黒子に拘束されている『発火能力』の丘原燎多が唇を震わせながら呟く。

その呟きを聞き取った黒子は、得意気にささやかな胸を張ると、言い放ったのだった。

「あの方達は我が常盤台中学の誇る三人組。『常盤台のエース』御坂美琴お姉様。『常盤台の良心』御坂未来先輩。そして、『常盤台のGTA』天翔希望先生ですわ！」
グレートティチャーアマカケ

事件は無事解決し、犯人達が護送車へと送られていく。

その中の一人、丘原に黒子が声をかけていた頃、希望は広場のベンチに腰掛け、ボーッと空を見上げている佐天の下に向かっていた。自分が近づいても気が付く様子のない佐天の頬に、希望はキンキンに冷えたヤシの実ジュースをピトツと密着させる。

「わひゃあつ！ の、希望さん！？ いきなり何するんですか！」
「悪い悪い。なんか考え事していたみたいだから、少し邪魔してみたんだよ」

「それって普通に考えて最低ですよね……」

ヤシの実ジュースをゴキュゴキュと飲みつつも、希望に返事をする佐天。いつの間にかやらいつもの調子に戻っている自分に、佐天は少し驚きを感じていた。

「さつきはお疲れ様。格好良かったぜ？」

隣に座り、缶のプルタブを開けながらそんなことを言う希望。佐天はわたたと両手を振りながら、全力で否定を開始する。

「そ、そんなことはありませんよ！ 結局犯人に殴られちゃっただけですし……何の役にも立てませんでしたし」

「いや、お前は十分人の役に立ったさ。……ほら」
「え？」

希望がふと広場の入り口を指差す。

その方向に顔を向けた佐天は、驚いたように目を見開いた。

「お姉ちゃん！ さつきはありがとう！」

「本当にありがとうございます……もうなんてお礼を言ってよいか……」

「い、いえ……そんなお礼なんて……」

ひたすらに感謝の意を述べる親子に、佐天は照れ臭そうにモジモジとしている。

一通りの会話が終わったところで、親子は仲睦まじそうに広場を去っていった。

その姿を見送っていた佐天の肩を、希望は優しくポンと叩く。

「ほらな？ お前がどう思っているのかは知らないが、あの人たちにとってお前はヒーローなんだよ。身を挺して自分を守ってくれた、誰よりも格好いい、そんな正義の味方」

「正義の……味方……」

希望の言葉を繰り返し、自分の拳を見つめる佐天。

彼女は昔から、誰かを守れるようなヒーローになりたかった。

超能力研究が進み、誰でも超能力を得られるようになった学園都市に來た時も、自分は絶対格好いい能力を身につけてやる、と意気込んでいた。

しかし、現実には佐天の心に重くのしかかる。

システムスキャンの結果は、『無能力者（レベル0）』

お前には素質がない、と直接言われたような気がした。

それからは自分がみるみる荒んでいくのを肌で感じていた。

高位の能力者はずるい。

どうせ低位の人達を見下しているに決まっている。

素質がない人だって全力で頑張っているのに。

そんなことばかり考えていた矢先に、今、希望から褒められた。そして、佐天の頭にこの前の火織の言葉が蘇る。

『もしも、彼女を守るための力が本当に欲しくなったならあの馬鹿教師にでも頼むことをお勧めしますよ。彼はああ見えてもなかなかつらい過去を持つ人です。あなたがしっかりと自分の決意を伝えれば、彼は必ず、あなたに力を授けてくれるはずですよ』

(……ああ、そうか)

火織の言いたかったことが、なんとなくわかった気がした。

「……ねえ、希望さん」

「ん？ どうした？」

佐天の呼びかけに、返事をする希望。そんな彼を佐天はしっかりと目つきで見つめながら、言った。

「私、力が欲しい」

「……………」

「前みたいに能力にこだわっているわけじゃない。でも、やっぱり私は初春を、みんなを守るような、そんな力が欲しいんです。だから——」

「……やれやれ、火織の言うとおりだな」

「え？」

あまりにも予想外な返事に、佐天はポカンと口を開ける。

そんな佐天を他所に、希望はバッグの中から一つの髪飾りを取り出した。

白を基調にした、桜の花のような形をした髪飾り。

「それは…………？」

「ああ、これか？ 前にお前が火織と知り合ったときがあったら

？　そのときにアイツから頼まれていたんだよ。『佐天さん専用の霊装を作ってあげてください』ってな」

「れい、そう？」

「霊装。ようするに魔法道具みたいなものだな。物体を憑代に魔術を使えるようにする装備。俺達が使っ魔術みたいに、身体に直接負担が来るわけじゃないから、お前みたいな能力開発を受けた人間でも魔術が使えるっつつスグレモノさ」

そして、希望はその髪飾りをすつと佐天の方に差し出す。

「これを……私に……？」

「だから言ったる？　これはお前専用の霊装だつて。……気に入らないか？」

「い、いえ！　そんなことないです！　……………ありがとう、ございます」

希望から髪飾りを受け取る。手に取った瞬間、何か温かいものが佐天の身体から髪飾りに放出されたような感覚がした。

「今のは……？」

「佐天の魔力が髪飾りに登録されたんだよ。人間ってのは個人差はあれど誰でも魔力を持っているもんだ。今の様子を見る限りじゃあお前は結構な量の魔力を持っているみたいだぞ？　素質があるな」

「素質が……ある……？」

「ああ、少し頑張れば一流の魔術師になれるくらいの魔力だ」

ニコツと希望が笑いかける。それに何を思ったか、佐天はしゃがみこむと突然顔を抑えて泣き出し始めたのだ。

突然の事態に希望はオロオロと狼狽している。

「お、おい、どうしたんだよ？」

「ご、ごめんなさい……私、嬉しくて……」

「嬉しい？」

「はい……今まで誰にも認められたことなくて。先生にも気を遣われてばかりで。初春にも迷惑ばかりかけちゃって……でも、今希望さんが私のことを認めてくれて……私、私……」

「そうか……今まで、よく頑張ってきたな。佐天」

そして、ぎゅっと希望が佐天を抱きしめる。それに一瞬佐天は顔を真っ赤にしたものの、気持ちよさそうに目を細めると、自分も希望の背中に腕を回し、彼の肩にそっと顔を寄せた。

「涙子、ですよ。希望さん……」

第五話 原作開始（オープニング）（後書き）

今回から次回予告を入れたと思います。

佐天（以下：佐）「いやー、今回は私と希望さんとのアツアツ展開が見物でしたねー♪」

未来（以下：未）「そ、そうですね……で、でも、希望とアツアツなのは佐天さんだけじゃありませんよ……？」

美琴（以下：美）「あら。じゃあ未来は希望とはもっとアツアツでラブラブってわけね？」

未「は、はいっ！？ お姉様！ 突然何を――」

佐「さて、今回は日常パート！」

美「私と黒子、初春さんの罠に嵌められた未来は希望とデートをすること」

佐「しかし！ そんな仲睦まじい二人の様子を私が許すはずもなく……って、なんですかこの台詞！ 私ただの嫉妬に燃える醜い女になっってますけど！？」

美「どこからか噂を聞きつけた常盤台生徒達も邪魔をしようと、食蜂先輩の指示のもと妨害を繰り返していく！」

佐「次回も楽しみです！ というわけで、次回！ 『義理兄妹』」
ファーストデート

美「次回もお楽しみにね！ 感想も待つてるわよ♪」

未「って、ちよつとおおおおおおおお？」

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【前編】（前書き）

こんにちは。

今回は前、中、後の三つに分けてお送りしたいと思います。

それでは、お楽しみください♪

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【前編】

「おー、流石は学園都市が誇るアミューズメントパーク。迫力が段違いだな」

「……………」

「あそこにあるのはジェットコースターか？　なんか角度が直角超えているんだが、セキュリティは大丈夫なんだろうな？」

「……………」

「観覧車もでけえなあ！　一周何分かかるんだよ！？」
「……………」

（どうしてこうなったんですかね…………）

隣で騒ぐ馬鹿義兄を無言で見つつ、フルチューニング『完全調整』こと御坂未来は密かに溜息をついた。

今、彼女達は学園都市でも有数のアミューズメントパーク、『スクールタウン』に来ている。

ここ『スクールタウン』は、学園都市の一学区をまるまる使って建造された、いわゆる観光都市である。ショッピングモールは勿論のこと、遊園地、映画館、スポーツジム、レストラン街…………などなど。若者がデートをするときに必要な設備が素晴らしいまでに揃っている、まさに『生徒たちの街』なのだ。

未来も美琴と共に何度か来たことがあるのだが、今回は色々と複雑な事情によって、希望と来てしまっていた。

（く、これも元はと言えばあの馬鹿お姉様のせいなんですよね…………）

ギュと渾身の力で拳を握る未来。

彼女は子供のようにはしゃぐ希望を他所に、昨日のことを思い出していた。

昨日の土曜日。

授業が半ドンで終了したため、未来はいつものメンバーと共に行きつけのファミリーストランに来ていた。

「ご注文はお決まりですか？」

「あ、私はデラックスダイナマイトストロベリーパフェで」

「私はココアですよ」

「私は……コーラかな。未来は？」

「私は白井さんと同じで」

「じゃあ私はメロンソーダお願いしま〜っす」

「……ふう。それにしても、最近なんか忙しいわね」

注文を終え、いかにも疲労の色を見せるように肩を鳴らす美琴。冗談めいた言葉だが、これがまた的を得ているのである。

この前の銀行強盗事件から一週間が経っているが、この一週間の間におよそ十件もの事件が起きている。どれも、能力者による犯行だ。

「お姉様は自業自得ですの。いつも避難してください、って言うておりますのに、自分から事件に首突っ込んでばかりで……」

「う。ま、まあそれは私の性分ってやつよ……あはは……」

「誤魔化しても駄目ですの」

目をキョロキョロと泳がせながら黒子の言葉を交わす美琴に、黒子は若干溜息をつきながら美琴を睨んでいた。

「そういえば……最近佐天さんも事件に介入するようになってきましたね」

「あ、初春さんもそう思いました？　なんかこの前の銀行強盗事件から、すごく明るくなったみたいに魔術みたいな能力を使って……あれって、希望がなんか関わっているんですか？」

「え？　あーはい。事件の後にいろいろあつて……希望さんから霊装っていう魔法具みたいなものを貰ったんですよ。ほら、これがその霊装で」

そう言う佐天は髪留めを外して自慢げに机の上に置いた。桃色の外殻が蛍光灯の光を浴びてなんとも不思議な輝きを放っている。

「へえ……アイツもなかなかセンスあるじゃない」

「どうやって使うんですの？」

「使い方、っていうか……なんか『こういう風になれ』って念じたらその通りに力が出るんですよ。能力みたいな演算もいらないから、私みたいな馬鹿には心強い味方なんです」

「でも、佐天さんの元気が戻って良かったですよ。ね、未来さん

「？」
「……………」

初春が声をかけるが、それには気付いた様子を見せずじいつと髪留めを見つめている未来。

そんな彼女の様子に美琴は「はは〜ん」と妖しく口の端をニタァツと上げ、耳元でそおつと呟いた。

「未来……もしかして、大好きなアニキからそういう贈り物を貰ってないことが悔しかったり？」

「は、はいっ！？ い、いきなり何を言いだすんですかお姉様！ そりゃ私だって長年の付き合いなんだから贈り物の一つや二つ貰いたいな〜とか思うときはありますけどそんなことでいちいち悔しさを感じたりとかそんな俗物てきな考えは微塵もありませんしあのその——」

「うわぁ、思わず引いちゃうくらいお約束な反応が来ちゃいましたね」

「もう、未来ったら可愛いんだから お姉ちゃんの包容力でナデナデしちゃうぞっ」

「お姉様キヤラが変わってますの食蜂先輩が乗り移ってますの」

赤くなつて縮こまる未来のあまりの可愛さに我慢できなくなつたのか、シスコンの兆候を見せつつある美琴がキヤラ崩壊もなんのそのと言つた様子で髪の毛をわしゃわしゃと掻き乱している。

そんな騒がしい中、一人静かに黙りこくっていた初春が、突然「そつだ！」と叫び、立ち上がった。

「良い考えがありますよ未来さん！」

「あ、あの……目がなんか怖いですよ初春さん。とりあえず、ほ、ほら、落ち着いて……」

「そんなこと言っている場合じゃありませんよ！　これは未来さんと希望さんの仲を進展させる作戦なんですから！」

『……………ほほお』

「は、はあっ！？　いきなり何言っちゃってんのよ初春！　別にそんなの必要ないでしょうが！」

「そ、そんなことはありませんが……別にわざわざ初春さん達の手を煩わせなくてもというか、なんというか……」

自分にとって向かい風になりかねない提案に必死に拒絶の意を示す佐天と俯いてごによごによと呟いている未来。

……………そして、初春の提案に二人顔を合わせて「うふふ……………」と気持ちの悪い笑みを浮かべているのは、我らが常盤台のエースとその梅雨払い。

初春は満足そうに頷きながら、言い放った。

「明日、お二人にはデートをしてもらいましょうー！」

『ぶはっ！　で、でーと！？』

「はい♪　スクールタウンで、恋人のようにイチャイチャとしてもらうんです！」

『そ、そんなことする必要が……ムグウツ！？』

「初春。その話、詳しく聞かせていたくださいですの」

「どっという風な流れ？　作戦は？　やっぱ制服じゃないとダメなのかなあ？」

抵抗しそうになった二人を女子中学生とは思えない綺麗な絞め技で拘束する美琴と黒子。隣で佐天が泡を吹き始める中、未来は冷静にこんなことを思っていた。

（……………ああ、絶対なにか面倒なことになるんでしょうね……………）

結局、そのデート計画。通称『いつまでも進展しない義理兄妹をさっさとくつつけちゃおう』作戦は、本人の許諾は一切ないままオペレーションスタートとなってしまうたのだった。

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【前編】（後書き）

感想、お待ちしております

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【中編】（前書き）

こんにちは。

禁書の第三期、もしくは超電磁砲の第二期、早く始まりませんか
え……。

それでは、どうぞ
♪

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【中編】

（まったく……どうしたのですかね……）

未来は子供のようにはいしゃいでいる希望の隣を歩きながら、はあ、と溜息をついた。

現在彼女達はスクールタウンの中心街、『遊覧の街』を歩いている。

ここ遊覧の街は様々な店が立ち並ぶ、いわゆるショッピング街。洋服店は勿論、ゲームセンター、あろうことがコンビニまである学園都市随一のバリエーションを誇っているのだ。

教師職が忙しい（？）希望は学園都市に来てから一度もここに来たことがないため、こんな年甲斐もなくテンションを最高潮にしているのである。

「な、なあ未来！ あそこのゲームセンター行ってみねえか？ 俺ゲームセンターって一回も行ったことねえんだよ！」

「はいはい。構いませんよ。今日は希望の行きたいところに行きましようね」

「マジか！ よっしゃ、今日は小遣いもたんまりあることだし、遊びまくるぜ！」

「あ」

そう言つと希望はぐいと未来の手を握り、引つ張り始める。

そんな普段は見せないような希望の表情と行動に、未来は呆れな

がらも、わずかに楽しそうに嘆息した。

(……ま、こんな喜んでくれるなら、嵌められた甲斐もあったって
ものですかね。お姉様、一応感謝しておきますよ)

「ほら、早く行こうぜー!」

「ちよ、そんな急かさなくてもちゃんと行きますって!」

未来の口元には、自然とした笑みが浮かんでいた。

(ちつくしよ……未来さん希望さんとイチヤイチヤしゃがってえ
〜!)

そんな恋人よろしく手を繋いでいる未来と希望を悔しそうに歯ぎ
しりしながら見ているのは、我らが魔術師見習い、今日も身体の成
長が著しい佐天涙子である。

結局なし崩し的に初春達三人の作戦を見過ごしてしまった佐天だ
が、希望が気になり始めている彼女がそんな簡単に未来の進展を見
過ごすはずがない。

結果、せっかくの日曜日にも関わらず、佐天はわざわざスクール
タウンへと赴き、二人の後をつけていたのだ。

（それにしても……希望さんホント子供みたいな顔してるなあ……。そんなにここに来れたのが嬉しいのかな？ あの人忙しそうだしな）……常盤台の特別講師は伊達じゃないってことか）

希望と知り合って早一か月が過ぎようとしているが、佐天は情報収集に力を入れ続けていた。今の彼女は自称『天翔希望オタク』と言いつけるほど、希望についての情報を手に入れていた。学園都市の個人情報保護システムは、果たしてどうなっているのか、甚だ疑問なところである。

佐天がそんな風に二人を監視していると、不意に後ろからトントんと肩を叩かれた。

（はて、誰だろ？）

頭に疑問符を浮かべながら、後ろを振り向くと、

「はあい、あなた、佐天涙子さんでしょ？ ちょろろと話があらんだけど、ちょおつといいかなあ？」

「あ、えと……誰ですか？」

いきなり目の前に現れた金髪の少女に戸惑いを隠せない様子の佐天。

あくまで彼女視点だが、結構の美少女である。スタイルもおそらくモデル並みにいいのであろう。ふくよかな胸とキュツとした身体がなんとも健康的な雰囲気醸し出している。

そして、着ている制服を見る限り、常盤台中学生である。ベージュ色のサマーセーターが、彼女の金髪にとってもマッチしている。

少女は、「あっ、いっけなあ。自己紹介がまだだったわねえ。ま、許してねえ」とニパツと笑った。本当にアイドルのようだ。

(……なに、この人。なんかめっちゃイタイんだけど)

佐天の脳内で『アホの子』認定されかけていることなどまったく気にもかけない様子で、少女は胸に手を当てながら、自信満々に言った。

「私は食蜂操祈。常盤台中学の三年生で、一応超能力者なお。学園都市的な序列で言うなら、第五位かなあ？ 能力名は『心理掌握^{メンタルアウツ}』。よつろしつくねえ……ま、私の存在力にかかればあなたの記憶から消え去っちゃうなんてことはないだろうけどねっ」

「は、はあ……って、レベル5！？ 第五位！？ 心理掌握って……！ め、めちゃくちや有名人じゃないですか！ あ、握手とかしてもらってもいいですか！」

「ふふっ、勿論♪ あなたも私の魅力にクラクラってね♪」

自称『ノゾミンは私のモノなんだよお』の食蜂操祈である。しかし、常盤台最大派閥のお嬢様がなぜこんなところにいるのだろうか。

佐天は輝く瞳で握手を交わしながらも、そんな疑問を抱いていた。そのとき、不意に食蜂が「ふふっ♪」と笑みを浮かべる。

「あなた……今、『なんでこんなお嬢様がこんなところにいるんだろ？』って思ったでしょう？」

「！ な、なんで私の考えを……？」

「私は精神系能力の最高位なのよお？ そんな私の読心力の目の前じゃ、どんな人も隠し事なんて出来やしないわっ」

「す、すごい……？」

食蜂の『心理掌握』の凄さを確認し、改めて感嘆する佐天。彼女

の反応に満足したのか、食蜂は「あははっ」と高らかに笑った。

「それじゃ、本題に入っていいかなあ？」

「本題？ ああ、っていうか、そもそもなんで私なんかに声をかけてきたんです？ 自分でこんなこと言うのもなんですけど、私無能力者だし、食蜂さんが声をかけなくなる理由がないと思うんですが……」

「それを今から説明するのっ。よく聞いてねえ」

「あ、はい……」

「まず最初に確認するんだけど……あなた、ノゾミンに気があるわよねえ？」

「はえっ!？」

突然の直球な質問に、佐天が顔を真っ赤にして動揺する。そして「いやいやいや！ そんなことは！」と抵抗を試みたが、

「隠しても無駄よお？ さっき言ったでしょ？ 『私の前では隠し事はできやしない』って」

「う……」

「と、いうことで、あなたはノゾミンのことが好きってことで、F A？」

「ふあ、ふあいなるあんさー……」

「よろしい♪ それじゃ、話は早いわねっ」

「は、話？」

そうよっ、と食蜂が偉そうに胸を張る。それと同時に、自己主張の激しい双丘がふよんと揺れた。

（くっそう……やっぱ大きいなこの人……!）

女の武器のあまりの性能差に絶望しかける佐天。そんな彼女の反応に気付き、楽しそうに笑う食蜂だったが、それはスルーして、彼女は口を開いた。

「あの二人。今デート中なんですよ？」

「あ、はい。御坂さん達の作戦に嵌められて……みたいな感じで、そうなっちゃってますね」

「やっぱりねえ、私の推察力に狂いはなかったわ」

「はあ……で、あの、話とは……」

「ん、そうだったわねえ……」

そう言うとき食蜂は一度、口をつぐみ、真剣な面持ちで言った。

「私達と協力して、あの二人の邪魔をしてみない？」

「……………」

「ん？ どうした未来。急に身体を震えさせて」

「い、いえ……なんか、突然身震いするような寒気が……」

「大丈夫か？」

「は、はい。風邪とかそんなのじゃないみたいですしね。とりあえ

「ず早く行きましょう」

「ん。そうだな」

（どっかで誰か噂でもしているんですかね……？）

いきなり襲ってきた悪寒に、未来は軽く自分の身体を抱く。なに
か自分を狙っているような感覚だったが……、

（ま、そんな大事な話じゃないでしょう）

そう思い、頭の隅に追いやった。

相変わらず繋いだままの右手を幸せそうに見て、そのままゲーム
センターへと入っていく。

「おお……ここがゲームセンターか……！」

「希望、そんなに目をキラキラさせないでください。一緒にいる私
が恥ずかしいです」

「だ、だってよお、こんな世界の楽園のような場所があるんだぜ！

？ 俺は今猛烈に感動している！」

「わ、分かりましたから！ どこそ第七位みたいな反応はやめて
ください！」

放っておいたらそのまま成仏するのではないかと思わず未来が心
配してしまうほど、幸せそうな表情をする希望。周囲の生暖かい視
線に顔を真っ赤にしながらも、未来は必死に義兄を止めていた。

「……ん？ どっかで見たことあると思ったら……希望じゃねえか」

「お、ホントだにやー」

「珍しいヤツが来たもんだなア」

「おーおー、久しぶりですなー」

「……お前らかよ」

突然声をかけてきた四人の面子に、軽くため息をつきながら希望が反応する。

そんな彼の様子に、ホスト風な少年が楽しそうに笑い、バンバンと希望の肩を叩いた。

「おいおい冷たいじゃんかよ、希望！俺達に会えて幸せだろ？」

「黙れこのクソメルヘン。ヘンゼルとグレーテルに菓子でもあげてろ」

「誰がメルヘンだコラ！垣根帝督だつつつの！」

帝督と名乗った少年が大声で希望の罵倒に答える。

垣根帝督。ここ学園都市の第二位に位置する、最強の超能力者である。能力名は『^{ダークマター}未元物質』自分の想像した通りのものを作り出す、いかにも非常識な能力だ。ちなみに彼の決め言葉は『俺の未元物質に常識は通用しねえ！』だったりする。

「そしてなんでお前はこんなところにいるんだよ」

「うるせエよ。バ垣根と上条に無理やり連れてこられたンだって」

「お前ってホント押しに弱いよな」

「放つとけ」

面倒くさそうに頭の後ろを掻いているこの少年は、一方通行。

垣根帝督の上位。つまりは学園都市での最強に君臨する、第一位の能力者である。

彼の能力は自分の身体に触れているすべての物質のベクトルを操るというもの。つまるところ、核兵器も効かないような、まさに『最強』の超能力者なのだ。

「んで、バカ二人、と」

「くくんなよ！ 悲しいだろうが！」

「そうだぜい。 オレは基本的に個性に溢れてるんだから、そんな扱いは納得できないにゃー」

希望の発言に全力で否定するツンツン頭の少年と金髪サングラスアロハシャツの少年。 上条当麻と土御門元春だ。

二人とも能力指数はレベル0の無能力者だが、それぞれが変わった能力を持っている。

上条の右手には『幻想殺し』という、それが異能の力であれば魔術だろうが超能力だろうが神の奇跡であろうが打ち消してしまうという、ある意味で最強の力が宿っているのだ。 ちなみにこれのせいで、彼は美琴から追われているのだが…… そんなことは希望の知ったことではないため、いつもスルーされている。

そして土御門。 彼は学園都市の学生でありながら、希望と同じ『必要悪の教会』に所属する、魔術師でもある。 元々は陰陽師の最高位だったのだが、学園都市にスパイとして潜入した結果、能力開発によって満足に魔術を使えなくなってしまったのだ。 しかし、能力開発によって発言した、レベル0の『肉体再生』によって、無理をすれば何回かは魔術が使えてしまうというなんとも肉体に優しい状況になってしまっている。

偶然にも遭遇した四人組に、希望はただただ溜息をついていた。

「あ、あの……この人たちは……？」

そんな中、未来がおどおどしながら二人…… 一方通行と垣根を指差す。 上条は美琴関係で、土御門は希望関係で既に知り合っているため、未来は残りの二人だけを確認したかったのだ。

「ああ、未来は初対面だったな。 ……この白いモヤシが、学園都市

第一位の一方通行。んで、こっちのヤクザが第二位の垣根帝督だ」

「だれがヤクザだ、だれが！」

「愉快的オブジェになりてエ様だなア！ 希望クウウウウウウウウウウウー！」

能力解放します、といわんばかりの勢いで希望に詰め寄る二人。実際最強に位置する二人なのだから、なかなかシャレにならない事態ではある。

流石に危険を感じた希望がとある禁術（女の子を紹介する）で、なんとか二人を沈めたのだが……。

「そっぴや、そこの君は希望の妹さんか？」

垣根が、未来についての質問を始めたのだ。

同時に、土御門と一方通行の肩がピクツと反応する。

あー、やばいなー……と希望が心配する中……、

「あ、はい。一応義理の妹っていう感じです」

「ほほオ……ソナ羨ましい関係を持ってたのか、テメエはア……」

「相変わらず、憎たらしいやつだぜい……」

「ちよつと待て。一方通行はともかく、なんで土御門までキレてんだよ。お前だつて同じような境遇……」

『問答、無用！』

「なぜだあああああああああああ？」

二人が、キレた。

モテない男達の僻み、といえばそれだけだが、この二人の僻みは本当にシャレにならない。

片や学園都市最強。片や暗殺術を極めた陰陽師。

（絶対死ぬって！）

そう思っや否や、希望は未来の手を掴み、ゲームセンターから脱兎のごとく逃げ出したのだった。

「ま、待ちやがれ！」

「覚えておけよ、希望！」

背後から降りかかる呪詛の言葉に、未来が思わず鳥肌を立ててしまったのは、致し方ないことだろう。

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【中編】（後書き）

感想、お待ちしております！

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【後編】（前書き）

こんにちは。ふゆいです。

やっとこさこのデート編も終了します。次回からは普段通りかな？

そして今回はなんとあの人が登場！ うん、この世界の魔術関係は腐っているね。

それでは、どうぞ！

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【後編】

【モテない同盟】の二人から必死に逃げ続け、希望と未来はいつの間にか遊園地エリアへと進入していた。

「はあ……はあ……なんで、こんな目に……」

「ぜえーっ、はあーっ、ぜー……」

冷静に息を整える未来と、対照的に両膝をつきながら荒い息継ぎを繰り返している希望。現役バリバリの中学生がそこまで疲労していないのに、実年齢高校生が疲労困憊しているというのはいかななものだろうか。さすがはニート教師である。

しかしまあ、逃亡中に音速レベルの石ころが飛んで来たり明らかに銃刀法違反だろ的な物体が飛来してきたのだから、彼の疲弊っぷりも頷けるが。

「ていうか、遊園地に来ちゃったんですね。随分走った気がします」
「はあ、はあ……遊園地、ねえ……まあ結構なメインアトラクションだな」

【スクールタウン】のメインともいえる施設。それがこの遊園地である。

日本全国四十七都道府県より「我がアトラクションこそは！」と自信を持って言える絶叫系をこれでもかというくらい凝縮させた遊園地。絶叫系が大好きな人にとっては天国とも楽園ともいえる場所

ではあるが、苦手な人にとってはただの地獄でしかない。絶叫系以外で存在する者はせいぜい観覧車くらいのものだ。しかも直接的な管理者は統括理事長と聞いているが……あの逆さ男は何を考えているのだろうか、甚だ疑問である。

「遊園地……ジェットコースター……！」

「あのー……未来さん？　なんかウチの電撃姫みたいなキラキラした目してますけど……どうしたんですか……」

「希望！」

「はい！」

突然のシャウト。大人しい未来が叫ぶとは珍しいこともあるものだ、と希望は心の奥底で燦る恐怖心を抑えつつ、応答する。

しかし当の未来本人はなぜかハイテンション。「一週間くらい睡眠をとらずにぶっ続けで仕事をしたらこんな風になるんじゃない？」といった類の壊れ方だ。

（……マズい。細かいことは全く分からないけど、今の未来は確実にヤバイ）

一週間に一度あるかないかの動揺が走る。今の彼女はアレだ。某錬金術師に右腕を切り落とされたにも関わらず恐怖心だけで廃人まですぐ追い込んだ、あのときの幻想殺し状態だ。

あーヤバイ、希望は密かに遊園地から未来を連れ出そうとゆっくり手を引いていく。出国ゲートまで後十メートル……！

「……………（ガシッ？）」

「ぐえ」

しかし人生はそうそう甘くない。希望逃亡計画は鬼気迫った表情

でそちらを見るクローン少女に阻まれてしまった。哀れ希望。彼の命運は今この瞬間に終焉を迎えた。

「え、えと……どうした？」

無駄とは思いつつも一応質問を形だけ返す希望。内心ビクビクが止まらないがそれでも場の流れを進めようとするのは流石といったところだろう。

未来は実に明るいイイ笑顔で、

「希望……私、遊園地って行ったことないんですよ……」

「へ、へえ……ま、まあ学園都市の学生は基本的に行ったことないと思うけどなあ……ほ、ほら、勉強とか忙しいし……」

「はい。しかし、今の私は忙しくありません。これはチャンスなのですよ！」

「……………」

あ、もう無理だね。敗北を確信した希望は静かに胸の前で十字を切る。

もう既にお気づきのことだとは思うが、希望は根っからの絶叫系嫌いだ。というか、空中自由落下系が死ぬほど嫌い。てか死ぬ。

以前に一方通行に（無理やり）連れて行かれたバンジージャンプ。

「ひやつほオ——？」と彼にしては珍しい歓声を上げていた一方通行の隣では、今にも身体から魂が抜けていくのではないかと心配になるくらい青ざめた表情でブクブクと泡を吹いている希望の姿があった。勿論、終わった後で一方通行への制裁も加えたが。

そんな彼が、絶叫系の宝庫ともいえるここ【スクールタウン】の遊園地から逃亡を図るのは極々自然なことと言えよう。彼にとっての生命線は、今この場から立ち去れるかどうかにかかっている。

「未来……こんなこというのもなんなんだがな、絶叫系に乗ると背が伸びなくなるという七不思議が……」

「もう私は培養液に入らない限り身体は成長しないので大丈夫です。問題ありません。そう、問題ないのです！ 私に託された使命はただ一つ……今！ 目の前に広がるアトラクションを制覇すること？」

「マジかよ……」

「ノゾミン最大のピーンチ？」頭を抱え絶望感に打ちひしがれる希望。一つ二つなら魔術を駆使してなんとか耐えられるかもしれないのに、このレイプ目少女はあろうことが全種類制覇とかほざいている。一般的、いや、普通に考えても死は免れない（精神的に）。飯に耐えきったとしても人間として最大の羞恥に身を染めることになるだろう。失禁とか、マジであり得る。

（考える……考えるんだ……？）

普段使わない頭脳をフル回転させて脱出口を模索する希望。かつてここまでネガティブな方向に全力をかける主人公がいただろうか。情けない限りだ。

あーでもないこーでもない、と必死に試行錯誤を繰り返す希望。しかし時間は待つてはくれなかった。

「それじゃ、まずはあのジェットコースター【神の右手】からですねー」

「待つて！ よりによって出オチ確定じゃん！ どつかで聞いたことがある上になんか右方の人が運営してそうなんだけど！？ 神の右席はなにしてるんだよ！」

この世界において神の右席は割と人生楽しんでます。世界を救

う？ そんなの幻想殺しに任せとけばいいじゃん。

「今なんか不吉な電波が頭の中に流れたんだがっ」

「多分私の漏電電気が感電したのでしょう。気にすることはありません」

「人体に影響があるだろ絶対？」

最早そういう問題ではないのだが、今の彼にそんなことに気が付く余裕はない。年齢の割に馬鹿力を行使した未来によって、為す術もなく連れ去られてしまった。

「うふふっ、二人はどうやらあのアトラクションに乗るみたいね……」

……

「あ、あのー……ほんとにやるんですか？　なんか今になって、こう、罪悪感がふつふつと沸いてきたんですが……」

「なに言ってるのよ。ここまで来たらやるしかないでしょう？　大丈夫。私達の嫉妬力にかかれば邪魔なんて朝飯前よ」

「いや、それってなんか最初から負けを認めているように聞こえるんですけど……」

ところ変わって食蜂&佐天ペア。

成り行きで未来とデートをしている希望を奪い返すべく、全力で妨害をしようと尾行を続けているのだが……客観的に自分たちを試みようとするとお粗末な二人組ではないか。なにしてんだろーなー、と佐天は食蜂に聞こえないようにこっそり溜息をついた。

希望たちが向かっているのはおそらくあの真つ赤なジェットコースターだろう。なんか【神の右手】とか書いてあるが、どういう意味があるのか見当もつかない。ある意味平穩の中に生きている少女ともいえる。

「よし……ノゾミンの近くの席に陣取って私の能力を使えば……意識を乗っ取ることでデートを終わらせられるハズよ……！」

「あーもーこの人やる気だよねうしろまったく取り返しのかないところまで来ちゃったんだけどー？」

「涙子ちゃん！ ほら急いだ急いだ！」

「いつの間にか名前予備にまで発展しちゃってるしもーやだー？」

自分が蒔いた種とはいえ予想の遙か斜め上を進んでいくレベル5。能力もぶっ飛んでいれば思考回路もぶっ飛んでいるのか。恐るべし食蜂操祈。超能力者って怖いなー。

（私……能力者じゃなくてよかったあ……）

魔術に進んだことを、全力で喜ぶ佐天涙子なのであった。

「よしよし！ やつと始まりますよわくわくしますよドッキドキが止まりませんね？」

「もうやだ降ろして今すぐ降ろしてねえ飴あげるから俺をここから解放してくれ？」

ジェットコースター、しかも最前列に着席した二人は、両極端な反応を見せていた。なんかもうゲコ太マックスな美琴状態と超音速飛行機に乘せられた乗組員状態の二人。同じものに乗るのにここまですべて対照的なリアクションがとれるのかと逆に尊敬したくなるくらいだ。

「まったく。【必要悪の教会】最強の魔術師とも言われている貴様がこんなオモチャで泣き叫ぶとはな。俺様を（相撲で）ギリギリまで追い詰めた奴とは思えん」

「黙れ赤毛？ 人間だれしも苦手はあるんだよ！ つか神の右席がこんなところでなにしているやがる！」

ニヤニヤと希望を見下ろす赤毛の青年に、希望が涙目になりながらも怒鳴る。というか、赤毛はなぜジェットコースターの先頭部分に特別席つばいの付けて座っているのだろうか。安全面とか考慮されてないように思えるが。

「俺様は常に時代の最先端に行く男。それは絶叫でも例外ではない。誰よりも怖いシートでこのアトラクションを楽しむのだ？」

「その大志は認めるがやってることはしょうもないな？ 馬鹿だろ

お前！ 良いから早く降りろよフィアンマ？」

「ふむ、しかしながらそういうわけにもいかんだ。俺様はアレイスターのアホからここを任されている身でな。お客様の安全を守るためによく見渡せる位置に座っておかねばならんのだよ？」

「魔術サイドにマトモなやつはおらんのかあ——っ？」

原作じゃもつとシリアスなやつだったじゃねえか……と俯いてぼやく希望。どうやらこの世界、キャラは同じでも状況は違うらしい。第三次世界大戦とか起きないだろ、これじゃ。

「まあとにかくだ。……出発進行」

「やったー？ やつと出発ですね！」

「くっそタイミング逸したあ——っ？」

「よし……二個後ろ。妥当な席ね」

「うう……絶叫系かあ。初春がいればなあ」

嫉妬に燃える二人、というか片方は微妙ではあるが、順調に作戦をこなしていた。

「さ・て・と」バックから愛用のリモコンを取り出そうとする

食蜂。これぞ彼女の能力の源。能力使用の道具、通称「みさきちリモコン」である。一見普通のテレビ用リモコンだが、これを使うとあら不思議、どんなに屈強な精神の持ち主でもたちどころに乗っ取ってしまうという恐怖の道具なのだ。

食蜂は今回もこれを使って希望の精神を支配下に置こうと、狙いを定めた。……が、

「あ、手荷物はお預かりしますねー」

「「あ」」

流石は学園都市一のアミューズメントパーク。施設の安全面もピカイチだ。どんなに小さな手荷物であっても見逃すことなくしっかりと預かってくれる。まさに遊園地の鏡である。

感心感心、周囲のお客様達がスクールタウンの評価をまた一段階上げた中、当の二人はというと……、

「「……………（ダラダラダラダラ）」」

顔中にびっしりと冷や汗をかいていた。それもそのはず、食蜂の力の源は押収されてしまったのだから。一応道具なしでも能力は使えるが、リモコンがあるのとないのとは制度に差が出てしまう。それに今回は高速で動く乗り物に乗っているの、狙いを定めることは至難の業だった。

案の定、二人は慌て始める。

「どどどどうするんですか！ リモコンとられちゃいましたよ！？」
「わ、私だつてこんな展開予想外だったわよ！ そうかよく考えたら私遊園地行ったことがなかった！」

「こんのど素人が？ 普通に考えて道具の類は没収されるに決まってるじゃん！」

「いやー、これはミサちゃんも予想外だったにやー。あははー……」
「うわあ、恐怖と絶望のあまりにキアラが全力全壊スターライトブレイカーだよ、この人。やっぱり人の幸せを破壊しようとしたからバチが当たったのかなあ……今度からは自重しよう」
『それでは、出発します』

テンパる食蜂。悟りを開いた佐天。ある意味で両方向の境地に辿り着いた二人を迎えたのは、形容しがたいほどの浮遊感だった。

「「うにやあああああああああああああああああああああああああああああああ？」」

その後、スクールタウン遊園地エリアで彼女達を見たものはいない。

「うーん、楽しかったですねえ」
「も、もう無理……もう動けない……」

夕日が傾きかけている午後六時。計画通りすべてのアトラクションを回りきった希望と未来は、最後のシメに定番の観覧車に乗って

いた。

なぜか座席が二人掛けのものしかないので、必然的に隣同士に座らなければならないのだが、これが逆にカップルの皆様に大好評。無論、未来も大満足である。なんたる幸せであろうか。

希望はげっそりとした顔だったが、心から楽しんでいる未来の前で一人だけ嫌そうにしているわけにもいかなないので、全精力をもつてしてなんとか表情を押しとどめていた。男・天翔希望ここにあり。

「希望……」

「ん？ どうした未来」

「今日は……その……いろいろとすみませんでした」

「なんだよ急に畏まって……」

「いえ……えと……最初は貴方の行きたいところに行っていていいとか言っていたのに、最終的には私があちこち引つ張りまわしちゃって

……迷惑ばかりかけちゃって……」

「……ばーか、そんなこと気にしなくてもいいんだよ」

荒っぽく未来の頭に手を乗せ、撫でながら笑う。猫のように気持ちよさそうに目を細めている未来を見ながらも、彼は言葉を続けた。

「お前は今まで苦労しすぎたんだ。少しくらいは女子中学生らしい楽しみを享受してもいいだろう？ だから、そんな落ち込んだり気にしたりすることないんだよ」

「あ……はい……」

「ま、結局は楽しめたんだからよかったじゃないか。俺も満足だよ。……お前のおんなな楽しそうな笑顔が見れてさ」

「っ！ の、希望？」

「あははっ」

当然の如く顔を真っ赤にする未来と、それを見て笑う希望。

いつもの関係。

いつもの光景。

彼女達にとっては、なんの代わり映えもしない、見慣れた情景。

しかし、今の彼らにはそれで十分だ。それ以上のものなんて、まだ、いない。

兄妹のようにしゃぐ彼らを、沈みゆく夕日が静かに照らしていた。

第六話 義理兄妹（ファーストデート）【後編】（後書き）

佐天（以下：佐）「うう……酷い目に会った……」

未来（以下：未）「まったく、人の幸せをぶち殺そうとするから、そんな目に会うんですよ」

美琴（以下：美）「でも邪魔されなくてよかったわね……。……で？ あの後はどこまでいったの？」

未「どこまで……とは？」

美「もー誤魔化さなくてもいいでしょう？ どこまでって聞かれたら……（ごによごによ）」

未「？ そんなことしてません！ 私と希望はあくまで兄妹！ そんなふしだらな関係に染まっではいけませんよ！」

佐「ほんとですか？ 案外イケるとどこまで行ったりして……」

未「佐天さんまで何言ってるんですかあ——？」

美「さて、次回からは原作でもおなじみ【幻想御手編】？ 超電磁砲の名を持つ私が大活躍するパートね！」

佐「そして原作とは違って私も大活躍！ 希望さんから貰った魔法をガンガン使って悪役をバツバツと打ち倒す！」

未「……二人合わせて？」

美・佐「スイートプ○キュア？ ……って、何やらせるのよ（ですか）？」

火織（以下：火）「それでは次回、【^{ストレンジ}異常事態】。お楽しみに」

佐「し、師匠！ いつの間に！」

未・美「師匠！？」

火「また次回お会いしましょう」

未・美・佐「「大事なところ取られたあ——っ？」」

第七話 異常事態（ストレンジ）？（前書き）

こんにちは。新訳三巻、面白かったです。皆様も是非ご一読ください。

さて、今回からついに【幻想御手編】ですね。頑張っていきたいと思います。

それでは、お楽しみください。

第七話 異常事態（ストレンジ）？

人間だれしも多少の差異はあれど向上心というものが存在する。

だからこそトーナメントやコンクールが成り立つのであり、競争社会というものが発生する。よりよい社会の発展に、向上心は欠かせないものだ。

しかし、その向上心もときには自分の身を滅ぼすものになりかねない。栄光を目指すあまりに、道程のショートカットを求めてズルをしようとするからだ。

たとえどんなに楽をしても、血の滲むような苦勞をした者に勝つことはできない。真の成功とは、真の努力を行ったものだけについてくる、自分を裏切らないものなのだから。

風紀委員第一七七支部。その業務用机で、眼鏡巨乳少女固法美偉は落胆していた。

目の前でチカチカと明滅するパソコンディスプレイには、今週一

週間で起こった事件の概要が記されている。学園都市中の風紀委員支部が協力して統計している表だ。その数はページにしておよそ十枚を超える。一枚五件ほどなので……五十件以上は起きている計算になるか。普通に考えても少しばかり多い気がする。

確かに、能力開発が盛んに行われているここ学園都市は、『外』と比べても事件数は多い。自らの能力を過信し、若しくは自分の存在価値を認めてもらうために……学園都市の能力者たちの一部が凶行に走るのも珍しくはない。だからこそ、彼女達のような風紀委員が設置されたぐらいであるし。

固法は力なくマウスをグリッドさせ、ページをスクロールさせる。

「……ここ最近起こっている事件……容疑者の能力強度が【書庫】と合致しないのよね……」

【書庫】とは、学園都市に住むすべての人間のデータを保管しているデータバンクの呼称である。それは個人の基本情報はおろか、能力名、レベル、能力詳細などの、その人の産業的価値さえも記されている、いわばカタログのようなもの。固法はそれを見ながら、先ほどから延々と溜息をつき続けているのだ。

学園都市には六つのレベルがあり、学生たちは自分の能力を上げるために日夜勉強に勤しんでいる。ここ学園都市に存在する七人のレベル5。一般人とは一線を画した彼らは、常に学生たちの目標であり、憧れ。一步でも近づくためなら、どんな努力も惜しまないような者だっている。

そのため、【書庫】の記録と事件状況にズレが起きる場合もあるのだが……今回はさすがに多すぎる。五十人以上の能力者が一気に、こんな短期間にレベルアップしたとは考えにくい。

「ホント……どうなっているの……?」

自分の理解の範疇を凌駕した何かが起こっている。
ゴクリ、と固法はムサシノ牛乳を一気に飲み干した。

「レベルアップ
幻想御手？」

「うん、そうだよお」

常盤台中学第三学年校舎飲食室の窓際のテーブル。

そこでは、常盤台中学特別講師の天翔希望が難しい表情で【心理
掌握】食蜂操祈の話聞いていた。

時間を見る限りでは既に昼休みは終わっているのだが、教師の希望とレベル5の食蜂は大人の事情でお咎め無しのため、平気で飲食室に居座っている。どうやら随分と込み入った内容のようだ。

希望の問いかけに、傍らのコーラを飲みながら食蜂は言葉を続ける。

「それを使うだけでレベルが上がるっていう都市伝説があるんだけどさあ。信憑性は全くのゼロだったのよお。でもお、なあんかここ最近奇妙な事件が増えてきてるのよねえ……」

「……………容疑者の能力指数が【書庫】と合わないっていうヤツか……………」

「うん、それだよ、それ。おかしいよねえ。全員が全員努力を始め
たからって一気にレベルが上がるわけじゃないしい……これはもお
幻想御手しかないんじゃないかなあ？」

「……………」

食蜂の言葉に答えることなく、希望は顎に手を当て思案を始める。

（【幻想御手事件】……超電磁砲では最もメジャーともいえる事件
だ。木山春生が教え子たちを助けるために、音楽ファイルに偽装し
た幻想御手を学園都市中に頒布。結果的に一万人以上の学生達が昏
睡状態に陥るという未曾有の大惨事となった事件。ラストでは美琴
がコアをレールガンで破壊して終息させたんだよね……）

「どうしたの？ ノゾミン」

「……あ？ ああいや、なんでもねえよ」

黙りこくった希望に、食蜂が首を傾げながら呼びかける。それに
対して希望は心配をかけまいと首を振ったのだが……それを見て一
層、食蜂は眉を顰めた。

「……………ねえ、ノゾミン」

「な、なんだよ」

「前から聞こうと思ってたんだけどさあ……………」

食蜂はそこで一旦言葉を切り、自身の長い金髪の毛先を指で弄り
ながら、

「……なんで、ノゾミンは学園都市で起こる事件のことを、事の顛
末まで全部しっかりすみずみまで知っているのかなあ……………」

「……………っ!？」

(バレ……た……?)

思わず、机の下でギュッと拳を握り込み食蜂から目を逸らしてしまふ希望。この世界の人間に、希望の正体を知られるわけにはいかない。彼はあくまでも【転生者】^{イレギュラー}。本来ならばこの世界に存在することもない、世界から拒絶されるはずの人間。絶対に隠し通さねばならないのだが……食蜂は一向に表情を変える様子を見せない。それどころか、希望の行動で更に疑いを深めていく。

「ノゾミン、忘れてたよねえ？ 私の前では隠し事はできないってさあ」

「……な……んの、ことだろうな……？」

「だから、隠し事は無駄だって」

「……………」

万事休す。退路はすべて断たれてしまった。

沈黙の続く飲食室に、柱時計の針の音が静かに響き渡る。

「……どうしても言いたくないって言うのならあ……私が直接、無理やりにでも聞きだしてあげるよお」

「……………っ……………」

食蜂は自らの鞆から愛用のリモコンを取り出し、希望の方へと向ける。

その挙動をじっと見据えながら、希望は自身の背中に冷たい感覚が襲い掛かってくるのを確かに感じていた。

「申し訳ありませんの、未来さん。一般人の貴女に風紀委員の仕事を手伝わせてしまつて……」

「いえいえ、気にしないでください。私こういう雑用みたいな好きなんですよ」

「そう言つて下さると助かりますの。初春が佐天さんと遊ぶからつて休暇を取つたりするから……」

「あはは……まあいいじゃないですか。少しくらい気分転換も大事ですつて」

レベル4の【閃光使い（ライトニングマスター）】御坂未来は、同じくレベル4の【空間移動】白井黒子の手伝いとして学園都市のパトロールを行っていた。どうやら人手が足りないようで、彼女の右腕には緑の腕章が存在を主張している。

「第七学区異常なし。第八、第九学区も大丈夫ですわね。……それでは一段落付いたところで第一七七支部に戻りましょうか」

「そうですね。確か、支部じゃ固法先輩がパソコンに張り付いたままでしたっけ？ 早く戻つて気を紛らわせてあげないと」

「私としては日ごろの仕返しに貧血でも起こしてくれれば」と思っているのですが……そういうわけにもいきませんのよね……」

「白井さん……」

「イッヒツヒ、と妖しく黒い笑いを浮かべる黒子。そんな彼女の様

子に未来はただただ苦笑いをするしかない。このツインテはいつまでたっても学習する態度を見せないようだ。このままだとまた初春にどやされるのが目に見えている。自業自得であろう。

そんな他愛のない会話を繰り返しながら、支部へと続く公園を通り過ぎる。

「……あれ？」

「ん？　どうかいたしましたの？」

「いや……なんか、落し物らしい鞆があそこの草むらに……」

そう言っただけで未来が指差した先には、ピンク色の可愛いリュックサックが、茂みに落ちている光景があった。外布も綺麗で、使い込まれた形跡はない。新品のリュックなのだろうか。

「まったく、落とした方もすぐに気付くべきですの。こーんなおニョーのリュックを放置していくなんて、よっぽど馬鹿ですわね」

「白井さん、それ死語です……」

「うつ……ま、まあとにかく、支部に持ち帰って後日落とし主を探すことにしましょう」

ぶつくさと文句を言いながら、黒子はリュックを持ち上げる。少し顔をしかめたのは、予想外にも重量があったからだろうか。

怪訝に思った黒子はリュックのジッパーを開け、中身を確認した。

「あんらまあ……可愛いぬいぐるみだこと」

「ゲコ太……お姉様が喜びそうですね」

緑基調のゲコ太ぬいぐるみ。子供たち及び第三位に絶大な人気を誇るカエルのぬいぐるみが、堂々とした風貌でリュックの中に収められていた。

若干気をそがれた様子で、黒子がゲコ太をリュックから取り出す。

「お姉様もなにが嬉しくてこんな両生類のファンをやっているのか……そこだけは未だに理解できませんわ」

「お姉様は可愛いものの好きですから」

「そうは言っても、ですの。お姉様は常盤台のエース。それなりの気品と嗜好を持っていただかないと――」

その時、何故彼女達は気付かなかったのだろうか。

黒子の手の上に鎮座しているゲコ太人形。その鳩尾部分がだんだんと歪み始めていたということに。

その歪みは徐々に酷さを増していき、ついにぬいぐるみの全身が捻り始める。

「！ し、白井さん！ ぬいぐるみが――」

「え？ これが、どうしたって――」

へらへらしている黒子の手元に気付いた未来が悲痛な叫び声をあげるが、既に時遅し。

黒子の言葉は最後まで紡がれることなく――

――瞬間、ゲコ太人形は園内を震撼させるほどの勢いで爆発したのだった。

第七話 異常事態（ストレンジ）？（後書き）

感想、お待ちしております。

第七話 異常事態（ストレンジ）？（前書き）

こんにちは。あけましておめでとうのふゆいです。
今回も幻想御手編。頑張りますよー。
それではお楽しみください。

第七話 異常事態（ストレンジ）？

「あ、危なかったですの……」

公園傍の電灯の上で、白井黒子は大きく息をついていた。目の前では激しい炎と黒煙がもうもつと上がっている。

数秒前まで自分の手にあつたゲコ太のぬいぐるみ。安全だろうとタ力をくくっていたソレが、突如として爆発したのだ。咄嗟の判断でテレポートしたので良かったものの……後数瞬遅ければ、確実に命を落としていただろう。

「し、白井さん！ 大丈夫ですか！？」

「ええ、少し危なかったですが、大したことはありませんの」

顔面蒼白と言った様子で自分の下に駆け寄ってくる未来に、黒子は笑って返す。実際、黒子が助かったのは未来の叫びがあつたからだ。口には出さないが、心の中では盛んにお礼の言葉を繰り返していた。以前お礼を言ったら「言わなくていい」と返されたためである。

パンパンと制服の裾を払い、黒子は地面に転移する。

「……さて、これからのことですけど……とりあえず支部に戻りましょう。固法先輩にこのことを報告しませんと」

「は、はい。でもまさかあんな偶然爆弾が落ちてるなんて……」

「偶然、ねえ……」

——はたして、そうでしょうかね。

黒子は静かに呟く。このとき、彼女には心当たりがあった。
ここ最近頻繁に起きている事件、犯人のレベルと書庫のデータが
噛み合わないという不可解な現象。今回の爆発を見た限り、レベル
は大能力者。つまりレベル4だろうと予測できるが……黒子のデー
タベースにそんな能力者はいない。

（これは少し力を入れないといけませんの……）

彼女の瞳に、強い覚悟の光が宿った。

「そんなに話したくないのならあ……私の読心力で直々に聞き出し
てあげるよ、ノゾミンっ」
「くっ……」

その頃、希望は食蜂によって危機に瀕していた。彼女の能力【心理掌握】は精神系能力の頂点。彼女の前では誰であつても隠し事をする事ができない。まさに人間自白剤。

自分の心の内を読まれた希望は、自らが転生者であるという事実を知られかけている。

（畜生……絶対、絶対これだけは隠し通さねえと！）

「……ふふっ、動揺が丸わかりだよお？ 早く学習しないと自分が痛い目見ちゃうんだゾ」

「……はっ、どうだかな。俺にだって切り札の一つ二つあるんだぜ？」

「嘘だね。いい加減理解したらあ？ 私はあなたの全てを知ることができる。心の動揺なんて、朝飯前に分かるの。為す術がないってことくらい、あなたの理解力でわからないわけじゃないでしょう？」

「……………ちっ」

まさに万事休す。学園都市最強の集団に属する彼女に、所詮無力者である彼が敵う通りなんてない。

（こうなったら、魔術を使うしか……）

しかし、魔術を使えば戦況はひっくり返るだろう。彼は猛者たちが集まる【必要悪の教会】においても屈指の実力者。しかも一部では【最強】とまで噂されているくらいだ。こんな小娘一人、希望にかかれば赤子の手を捻るように倒せる。

だが……

（俺には……できねえ！ 自分の教え子を傷つけるなんて、俺にはできっこねえ！）

彼は教師。自分の生徒に手をかけるなんてことは、神が許しても彼本人が許さない。その上彼は転生時に妹、聖と約束していたことがある。

『一人でも多くの人を救って』

それには勿論目の前の少女も含まれている。火織とはまた違う方向で、彼はすべての物を救わなければならない。そのため、食蜂を倒すことは出来ない。ましてや、怪我させるなんて……。

まさに、絶体絶命だった。

「……それじゃ、全部見せてもらっよう？ 覚悟はいいねえ？」
「くっ……そお……！」

もう駄目か。万策尽きた彼は、神に祈るように目を閉じる。もはや神頼みしか残っていない。

（誰か……！）

食蜂が右手のリモコンのボタンに手をかける。

……そして、ポチ、という音が希望の耳に届いた。

「……………！」

一層強く目を閉じる。少しでも、抵抗を……

「……………？」

身構えた希望は、なかなかやってこない洗脳の感覚にうつすらと目を開ける。一体何が起きたのだろうか。

希望の狭い視界に、金髪少女の姿が映る。

なぜか、彼女は引き攣った表情を浮かべていた。

「……あなた……一体、どういう思考力なのかしらあ？ 私の邪魔をするなんて、いい度胸力じゃない」

「残念ながら、私はアンタみたいな馬鹿より家族の方が何倍も大切な。妹がバカ兄貴を助けに来て、一体なにが悪いのかしら？ 常盤台の女王サマ？」

（家族……？ 妹……？）

「ほら、いつまでも呆けてるんじゃないわよアニキ」

バンバンと希望の頬が叩かれる。意外と強い痛みに襲われ、希望は両目をはつきりと開いた。

目の前には……

「まったく、イギリスのエースがこんなところでなにやってんだか」

「み、こと……？」

「そうよ、大正解。アンタの愛する自慢の妹が、アニキの窮地を救いに来たってこと」

食蜂に向かって右手を突出し、リモコンに電流を流して故障させている超電磁砲の姿があった。

美琴の右手を取りながらゆっくりと立ち上がる。

「サンキュー、今回はマジで助かったわ、美琴」

「礼なら後で何倍でも受け取ってあげるから、まずはあのクソ忌々しい年増を倒すわよ！」

「だ、誰が年増なのかなあ？ 御坂さあん。……貴女の発育力が空しいだけなんじゃないの？」

「……どうやら怪我だけじゃ満足できないみたいね、第五位サマは」

「貴女こそ、私の仕事を邪魔しておいてただで済むと思っているの？ 第三位」

先ほどまでの緩い空気が一転、途端に緊迫した雰囲気食堂を支配した。

「……確かにシングルスじゃ貴女には敵わないかもしれないけどお……」

食蜂はバックから別のリモコンを取り出し、連続でボタンをプッシュ。プッシュ。プッシュ。

同時に、ドタドタといくつもの足音が学園に木霊して……

「団体戦なら、こっちが有利なのよねえ」

食堂の扉が開かれ、数十人もの常盤台生徒が進入してきたのだ。

「なっ……！？」

「さすがの超電磁砲でも、この人数を相手にはできないでしょう？ましてや、何の罪もない一般生徒を倒すわけにもいかない」

「あ、アンタねえ……！」

美琴が悔しそうに唸る。それを楽しそうに見ながら、食蜂は勝ち誇ったように笑った。

「この勝負。どうやら私の勝ちのようね――」

「……言いたいことはそれだけか？ 食蜂」

しかし、ただ一人。彼だけは違った。
確かに彼は教師だ。教え子には手を出せない。生徒を傷つけることはできない。……そう、普通ならば。

「お前はちよつとばかりオイタが過ぎたなあ……これはもう、どうにかしないと常盤台の面子に関わる」

「で、でも、ノゾミンにいたい何ができるのかしらあ？ あなたは教師なのよお？ 私に手を出せるとは、到底思えないけど……」

「甘いな、お前」

本当に甘い。彼はそう呟くと、【魔法名】を口にする。

「……………【Themis666（悪しきものに正義の鉄槌を）】」

それは普通なら殺し名。原作でステイルが上条に言ったように、魔術師にとって魔法名は他人を殺す覚悟と言える。

だが、希望にとってソレは殺し名でもなんでもない。

「食蜂操祈。お前はとても運がいい」

彼は教師。それゆえに、彼は一つの大義名分で他人を罰することができる。

「この天翔希望から、マンツーマンで個人的に【教育】を受けることができないんだからなあ！」

教育的制裁。

教師が持つ権力においてまさに最強ともいえる権限。絶対的な審判。ソレは一般生徒である食蜂を戦慄させるには十分すぎる名目だった。

希望の目前に、緑色の分厚い本が姿を現す。

「神力全書、第一章『攻撃』第二節『範囲対象敵多数』第八項『特

殊』より抜粋。『己の内より湧き出る欲望に応じて、眠り姫の如く深い眠りへ落ちてゆけ』妖精ララバイの呪歌？」

「なっ、なんなのソレ？ まさかおとぎ話みたいな魔法が本当に存在するわけ——」

「それは、テメエの心に聞いてみるんだな、食蜂。お前の可愛い手駒たちは今のでお休みになっているぜ？」

「そ、そんな馬鹿な……この人数よ？ それを一瞬で眠らせるなんて……」

あまりに信じられない光景に、食蜂は顔を真っ青にしながら呆然と立ち尽くしている。超能力では間違いない起こりえない現象に、レベル5である彼女ですら予想の範疇を超えていた。

だが、希望にとってはなんでもない行動。【神の右席】全メンバアークビシヨーに勝利し、【必要悪の教会】では無敵を誇り、あまつさえ最大主教ツラと肩を並べるのではないかと言われるくらいの実力者である希望にとっては、朝飯前もいいところだった。

戦慄する食蜂に美琴が背伸びをしながら近づいていく。

「あー、最初は信じられないわよねー。魔術なんてオカルトめいた存在。私もコイツと知り合ったばかりのときはバカじゃないかと思っただけどさあ……実際に目にすると、これがまた信じるしかないくらいの威力なんだわ、コレが」

「あ……嘘……そんな……」

「ま、今はそんなこと言ってられる余裕はないか。それじゃあとであえず……」

コインを取り出し、指の上へ。そして、食蜂に狙いを定めると、

「眠っちゃおつか、アンタもさ」

勢いよく、【超電磁砲】をぶっ放したのだった。

第七話 異常事態（ストレンジ）？（後書き）

感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6835t/>

とある魔術の転生者

2012年1月2日21時49分発行